

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.312

麻生路郎☆主宰



mio

五月號

昭和廿三年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿八年五月一日郵便第八卷第五號

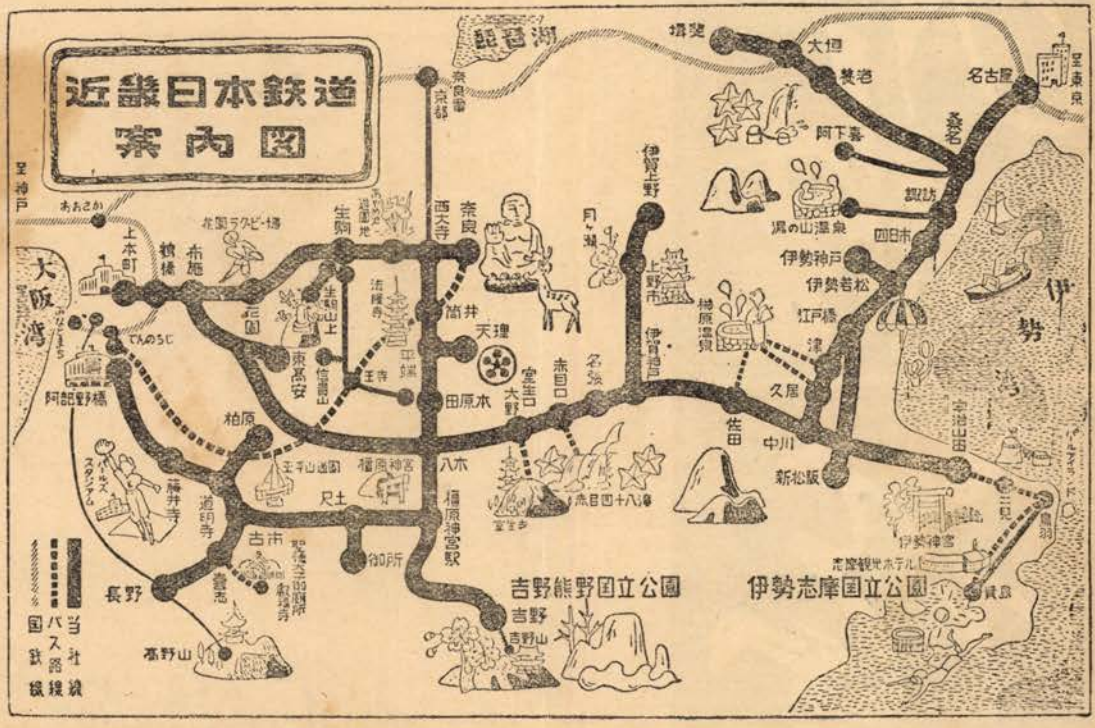
(毎月一回一日發行)

創刊大正十三年・通卷三百十二号

五月号目次

(昭和廿八年)

題字	麻生 路郎
表紙	米田三男之介
半世紀	麻生 路郎 (三)
いとへん	堀口 塊人 (三)
川柳を交通四方山話	鮎美・水谷・蒙 香・淡舟・貴山 (四)
川柳の独創	安川久留美 (三)
川柳と俳句の区別に對する私見	戸田 古方 (四)
病床愚感	森 彦六 (三〇)
人間横丁(一)	東野 大八 (七)
路郎を語る	岩崎 愛二 (三三)
野人語	麻生 路郎 (三三)
平忠盛	富士野鞍馬 (三三)
句の洗礼	吉田 水車 (三三)
★	
不朽洞句帖	麻生 路郎 (二五)
近作柳欄	麻生路郎選 (二六)
川柳塔	麻生路郎選 (二八)
同舟近詠	話 家 (二九)
一路集	「招待」 高駕垂鈍選 (三二)
	友淵貴山選 (三二)
各地柳壇	(二六)
大万川柳から	(二五)
柳界展望	(三三) BKだより (三三)
不朽洞会から	(三〇) 編輯局にて (三〇)



半世紀紀

四月の末か、この五月の始で、私が川柳を作り出してから満五〇年になる。五〇年と云えば半世紀である。とワカリ切つたことも云いたくなる。よくも飽きずに、やつたものだと呆れている人もあるし、吉田さんにバカヤローと云われそうない気もする。

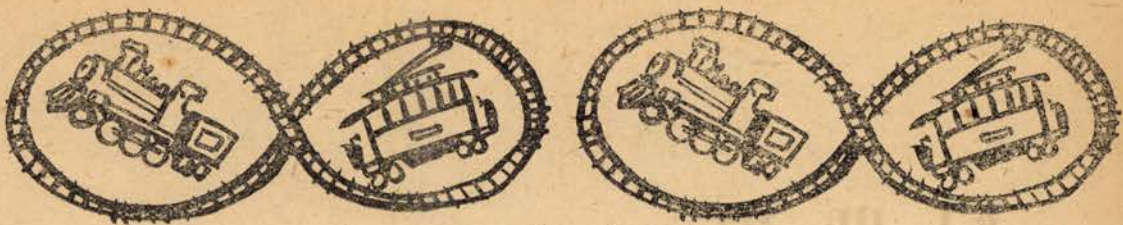
しかし、吉田さんと私は云いたい。(何れも吉田はなないが) あんたが世間からワンマンと云われようが、何んと云われようが、新聞や他党からあらゆるバリザンボウを浴びせかけられようが、泰然自若として首相の椅子にデーンと坐り込んでいられるのも、そこには政治に対する相当な魅力と忍耐があるのではあるうと、想像をたくましくして

の一人かも知れない。しかし、人生の面白味は、そのバカヤロー的存在にあると考えられないこともない。アレをちよつびり、コレを少々かじつて遂に何ンにも得られないのと同日の論ではない。よくも、同じことを飽きもせず、五〇年間もやつて来たと言われ

しているうちに、いつの間にか過ぎ去つた五〇年であつて、誰やらの句ではないが「白粉の下は光陰矢の如し」の口で、これからの五〇年とは訳が違ふ。従つて飽きるどころか、まだまだ日が足りないの、今後の時間表作製に腐心しているところを見ると、バカヤロー的存在も病膏育に入つた訳であらう。

(麻生路郎)





川柳を通じて

交通四方山話

鮎 美||皆さんお忙しい処を御苦労さんでございます。

今晚は川柳を通じて交通四方山話をして頂くとう云うのでお集り願つたわけです。まあ自分達交通業に従事している者、と云つても私の様に現場でなく、本社勤務ですと普通の会社に勤めているのとおまゝり変りはない様ですが、皆をれん、二十年以上も勤務して居られる訳ですから何か面白いお話を持つて居られることと思ひます。紫香さんから一つ……。

紫 香||

親切な車掌に叱り飛ばされ

る (法界子)

と云う句がありますが、職務に忠実な車掌さんには、笑まじさを覚えます。車掌と云えば、これは他人から聞いた話で大分以前の事ですが、当事の一番おえら方である専務さんが、車掌の代りをしたと云う話があります。丁度ラッシュユアツで電車が超満員でした。或駅へ着いて今度発車し

たトタンに、車掌が居ないのに氣付いて(笑声)大騒ぎをしたのですが丁度乗り合して

いたその当時の専務の小林一三(元商相)さんが、電車を止めることなくそのまま終着駅まで車掌の代りをして無事に運轉ダイヤを狂わさずに済ませられたと云うことです。うちの会社では何処でもそうですが、特に乗客へのサービスと云う事を従業員に口やかましく云われていますが、これ等も一刻を争う乗客の爲に背廣の車掌さんがサービスをしてみ本を示された朗かな話だと思ひます。

水 容||小林さんはエピソードの多い人ですね。新米の改札係が社長であることを知らず

に小林さんの無札を咎め、後で返つて特に昇給されたと云う様な話もありますね。

鮎 美||路郎先生の句に

故郷の父に似てゐて車掌切りそこね

と云うのがありますが、「切り

そこね」と云う処から見ると、これは改札ではなさそうです。昔市電に乗替え切符があつた頃の事でしょう。

淡 舟||乗替え切符では苦勞しました。それで失敗したことがあります。交叉点で乗替え切符を地上に降りて切つている間に何時の間にやら電車が発車してしまつて

次の電車で追いかけたんですが、何しろあれは鉄の入れる処が多いし、交叉点では降りる人も相当に多い、それを短時間で捌かんならんのですから。然し乗替え券の改竄については熟練者は裏からでも見事に行き先や乗替え地点を切る車掌が居りました。

貴 山||あれは乗替え場所と行き先と時間も切つてありましたな。

淡 舟||路面地図と横の方に時計の様なもの印刷してあつて、乗替え地点と行き先と乗替え時間を切るわけですね。午前は赤、午後は黒で印刷してありました。

貴 山||それでも、わざと乗替え券を貰つて色々用を足したもんです。学生時代に東雲町の学校から難波へ帰えるのに、四ツ橋に乗替えて、四ツ橋のマルキのパン屋で

よくパンを買つたものでした。それで四ツ橋で降りてパンを買つている時にスリにやられた事がある。(笑声)スリは捕つたが、一緒に新町署へ連れて行かれて始末書を書かれ、帰るのが遅くなつてしまつた。その始末書代が二十

銭でえらい高いパンになつてしまつた。

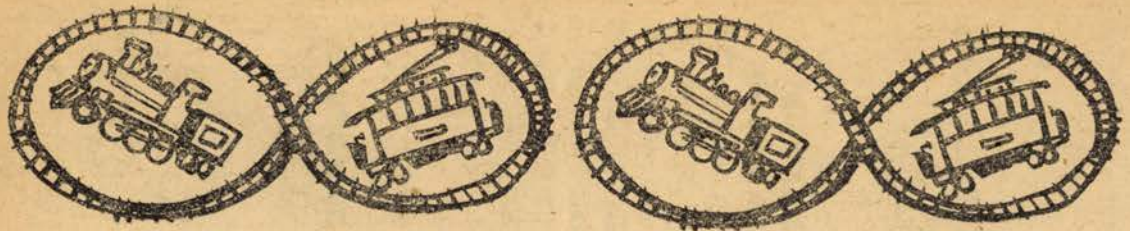
鮎 美||その頃はパンは安かつたからね。

貴 山||パンは一ヶ二銭でしたよ。

鮎 美||乗替え券を復活すると云う様な話はありませんか。

淡 舟||市会などでよく出るらしいですが、値上するのだつたら乗替え券を發行せよと云う様な話だね。然し実現はしないでしょうあれを發行すると繁雑だし、車掌はえらい努力ですよ。昔の車掌でこそ黙つてしたんですなあ。

鮎 美||一時各電鉄の乗替え切符を集めた事がありました。私達は職員証で他社でも黙認して乗せて貰つてはいるのですが、切符が慾しさに記念に残しますので小声で頼み込んで、乗替え券を貰つたものです。それも改竄してないと値打ちがないのでボン



ボンと穴を明けて貰つて喜んで
たものです。

水 客 山 〓コレクシヨンと云え
ば國鉄の各駅のスタンプを集
める事が流行して、旅行して
いても次の駅の停車時分を見
ては駅長室まで走つて行つて
スタンプを取り、長い旅を退
屈せずに済んだ覚えがありま
す。時には三十秒停車なんか
だと、テエツと走らんなら
んので退屈処ではありません
紫 香 〓私もよう水客に頼ん
でスタンプを集めたものでし
た。

水 客 〓終いには行かんと手
紙で送つて貰つたりしたもの
です。

貴 山 〓最近ワンマンカー
(車掌なしのバス)が、動いて
ますがあれは中々運轉手は重
労働でえらいでしょうな。あ
れは手当は出ないんですか。

淡 舟 〓ワンマン手当と云う
のがありますが、車掌だけの
手当はくれません。三千円位
です。一人二役だから相当神
経を使わなければなりません
鮎 美 〓僕はまだ乗つた事な
いのですがやつぱり運轉手が
お金受取るんですか。

淡 舟 〓

ワンマンカー千圓札が乗り

おくれ (順風)

と云う句があるが、乗る時に
切符又は現金を運轉台備付の
ガラス製の料金箱へ入れてか
らでないに乗せてくれませ
ん。乗るのは前から乗つて降
りるのは後から降りるんで
す車内に六ヶ所程の押ボタン
があつて、それを押して次
の駅で降りることを運轉手に
知らせます。出口は後の方だ
から乗客が降りる時にステツ
プを踏むと運轉台に知らせ燈
が点くので降りていることが
分るわけです。

ワンマンカーマイクで色氣
ちと足らず (順風)

左の腕にマイクがついていて
駅名告知をします。釣銭も渡
さなければならぬし中々大
変ですよ。

鮎 美 〓ワンマンカーがあら
われたりなんかして大阪と云
う処はホントニ忙しい処で
すね。昔、

大阪は轢かれかけてもよい
ところ

と云うかほるさんの名句があ
りました。交通事故なども
随分多いでしょうね。

貴 山 〓

電車事故チヨークを持つて
走つたり

と云う私の句がありました
が、電車事故には電車の止つ
た位置とか、死体の場所、下
駄の脱げてある場所を一々チ
ヨークでしるすのです。事故
がある時程時間の経つのが早
いもので毎日同じ仕事を繰り
返している時はとても時間が
長いものです。然し事故程嫌
なものはありません。

出席者

阪 神 水谷 鮎美

國 鉄 正本 水客

京 阪 神 黒川 紫香

大 阪 市 電 富岡 淡舟

南 海 友淵 貴山

淡 舟 〓下駄が揃えてあれば
自殺ですな。

水 客 〓列車の機関士が、人
を轢いた時の感じは小砂利を
つぶした様にジャリツと云う
位の感じしかありません。だ
から実際に轢死があつた場合
も氣付かずに機関区まで帰つ
て後から警察の連絡で時間か
ら推定して、その列車だと云

うのでよく調べてみると機関
車の前の処に生首がちよこん
と乗つていたと云う様な嘘の
様な話もあります。

貴 山 〓轢死体の身元が判れ
ばいいのですが、判らなけれ
ば夜通し番をしなければなら
ない時があるんです。

淡 舟 〓その番は誰がするの
です。

貴 山 〓まあ当務助役と職員
とが、夜通し番をするので
す。青いシグナルが嫌に淋し
い氣がします。寒いときに
は炭一俵位焚きます。各駅に
受持区域があつて、その死体
が一寸でも受持区域にあれ
ば、他区間の当務助役はお願
いしますと、さつさと帰つて
しまいます。

鮎 美 〓機関車に生首がボツ
ンと乗つていたなど、考えて
も身の毛がよだちますが、私
の社でもぞつとすることがあり
ました。ボデーの前面に不意
に出て来た人が顔をぶつ
けて即死したのがありました
が、それが何と不思議な事に
幾ら車庫で塗装しても幽かに
顔面の型が浮き出て来て不氣
味に幽鬼を感じるのです。当分
の間その車を出庫させなかつ
た話もあります。

淡 舟 〓市電でも一五六四号
車は「人殺し」と云つて車掌
や運轉手は誰も乗り手がな

く車番を一五〇〇番に書きま
えた事があります。

貴 山 山 二 その車は矢張り事故
が多いのですか。

淡 舟 二 妙に即死事故が多い
でした。

水 客 二 矢張り運轉手の心理
状態が影響するのでしよう
ね。

貴 山 二 南海の句会で
踏切番扶養家族の多い顔
(正明)

と云うのがありますが、踏切
番程、責任の重いものはない
のです。それでいて職階が一
番低いのです。只優遇されて
いるのは、踏切番が、踏切警
手と名前が違つただけです。

現在会社の方では踏切警手は
三十五才位まではよいので
が、扶養家族が三人もあれば
採用されません。

水 客 二 山雨楼さんの句に
國鉄の事故にやめてもどき
つとす

があります、事故で思い出
すのは昭和何年かの西成線の
ガソリンカー轉覆事件です。
満員の乗客が一瞬に黒焦げに
なつてしまつたのですから誰
が誰やら判らない。死体を撰
り分けて、すらりと並んだ棺
桶に一つ一つ入れたのは並大
抵ではありませんでした。そ

の一人について家族の家へあ
やまりに行くところを危うく
逃げて帰つた思い出は冷汗も
のです。

鮎 美 二 さすがは國鉄、儲け
も大きいかわりに事故も大き
い。私達私鉄では、まだ黒焦
げ事故はありませんね。それ
では事故はこれ位にして、ス
トについてお話し下さい。

水 客 二 私とこ(國鉄)はスト
は出来ません。(笑聲)

鮎 美 二 えらいあつさりして
ますな。(笑聲) 南海さんや
りなはれ……。

淡 舟 二 市電が應援しました
やないか……。

貴 山 二 そうですな、あれは
何時頃だつたかな、大分昔の
ことですが、南海もストライ
キで現場のものが全部高野山
に上つた事があります。結局
ストに負けて歸りに幹部級が
橋本と長野と塚で検束されて
難波へたどり着いたのは、ほ
んの少数で、ほんまの雑魚や
な(笑聲) その他大勢や……

その時私はストはしなかつ
た。運轉したんです。本社勤
務だつたからね。それで和歌
山まで運轉して行くに食堂で
御馳走してくれる。難波まで
歸つて来ると、いづも屋のま
むしを喰わしてくれる。(笑

聲) 大事にしてくれました
よ。歸つて来るとまむしがズ
ラリと並んでる。百も二百も
……そんなに喰われへん……

(笑聲)
淡 舟 二 昔のストの方が面白
かつた。今はどちらも水臭い。

鮎 美 二 昔はストで辞めると
人員が少くなるでしよう。す
ると「焼きなほし」と云つて
又別の会社へ就職するんで
す。こう云うストの場合のた
めに、電鉄会社では、大学出
でも、改札から車掌、運轉手
と一通りやらす事になつたん
です。

俺もよんどころなくやるス
トライキ (半里宇)

私鉄スト レールに一寸寝
たくなり (花村)

スト明けの電車の音を聞き
て寝る (水客)

貴 山 二 ストを一日やること
ールがさびています。一夜越
すと夜露のために一層さびが
ひどいですね。
鮎 美 二 そのさびはね。労資
共々の心のさびと持つて来た
いね。だからストは続くんで
す。それではストはこれ位で
ストツブして、大分遅くな
つて来ましたから終電車(終
列車)と行きましよう。
紫 香 二 僕は終電車に乗つた

ことないね。
貴 山 二 恐妻家か真面目な方
かの交叉点やな。

鮎 美 二 紫香さんは飲まんか
らね。矢張り終電車は酔つば
らつてる人が大半ですな。貴
山さん、何か一つ……。

貴 山 二
終電車大きな話聞かされる
それで終り(笑聲) (貴山)

淡 舟 二 先生に頂いた短冊に
もう飲めぬ人ばかりの終
電車

と云うのがありました。
貴 山 二 南海の句会で、先生
の句に
酔うた酔うた電車を別に出
してくれ

云うのがありました(笑聲)
その句の後に「南海諸君」だ
つたかな？何か書いてありま
した。私は酔うていて難波
から佐野まで行つてしても、
又難波へ戻りそれから住之江
の車庫へ入つてしまった事があ
る。淡舟さん、紫香さん、水客
さん皆真面目な人達やから終
電の味はわからんね。

淡 舟 二 僕は乗せた方や
水 客 二 終電車なんか知らんね
早く歸るか、そうでなかつた
ら泊つて来る。(笑聲) 朝の
一番なら乗つた事がある。

鮎 美 二 終電になると、車掌
も周囲の氣分に同和して何か
唄つているのがありました
が、愉快でした。

貴 山 二 親切な車掌になると
何処で降りるのか一々きいて
おいて、その駅で起している
のがあります。

淡 舟 二 うちで酒の好きな車
掌がいてね、終電に乗つたん
ですが終電はねむいんです。
平野町に「沢の鶴」の本舗が
あるでしよう。「平野町」と
云う処を思はず「沢の鶴」と
云つたんです(笑聲)

水 客 二 終電當時に列車が非
常にこむので宮原停車場まで
廻送列車に乗つて、終列車に
乗るつもりだつたのが、その
廻送車が十五分程事故でへた
つていて間に終列車が出てし
まつて、一日信州へ行くのが
遅れた事があります。そのた
めに一日会議がおくれたんで
す。

鮎 美 二 話せばいくらでも面
白い話が出て来そうですが、
あまり遅くなつても、終電に
乗つた事のない人にお氣の毒
ですからこれ位で解散するこ
とにいたしましたようか。それ
ではどうも有難う。
(梨里筆記)



人間横丁 (I)

東野大八

皇太子さま

天皇様の御名代として英国女王の戴冠式に参列されるため、皇太子さまは目下御渡英中だが、この皇太子様の学友、学習院大学政経学部一年山本秀美君(二七)がひよつこり社に現れた。そこでいろいろと学友からみた皇太子さまのご日常について同君からきいた。なかなか愉快な皇太子さまの人となりがあった。

殿下は音楽がお好きで、ベートーベンの第九交響楽が殊のほかお気に召していられる風。歌謡曲では山小屋の灯が一等お好きで、ご自身もお歌いになる。殿下のお声は響きのあるバリドンでなかなかお上手。そこで学友が音楽部にお入りになつてはというところ、あそこは女学生が多くてニガ手だなあかと尻ごみされたそう。ロンドン行きについては、かまゆりの人がやつてくれるからその点は心丈夫だが、どうも人が大勢いる処に出るのは、ちよつと困るなと笑つていられたという。今度の御渡英はまことにもつて大役だけ

に殿下の心ないさゝか落つかない風に見られるが、特に気にしていられるのは英会話、何分英國はキング、イングリッシュで米語より格調が高いからヴァイニング夫人仕込みのものだけでは気がかりらしい。ところがさきごろ来朝したオックスフォード大学の職

はわれわれに、私が皇太子と生れたことは私自らの意志ではない、全く運命に過ぎないと思つてい。そして私はこの与えられた運命に忠実でありたい。とそうもらされていましたが殿下はどこか人間のな方ですよ



た。人間の裁量に缺けた王者は滅亡する、とは越王夫差の言葉だが若き日本のプリンスがこの一言を承知されたい。私は最後に同君に対してこうい

球チームの学生五、六人を相手に談笑され、終つて学友に「あんな具合ではどうだ」と得意の微笑をもらされ、大いに自信のほどを示されたという。

「短歌、俳句の素養も結構なことですが、何卒川柳もろんと研究されるようにいつて頂きたい。川柳には人間のすべてがあります。川柳は古川柳をお読みになつてニヤリとお笑いになるような殿下が、つぎの日本を背負われれば日本はも

つと住みよい平和な日本になるでしょう」と。そういつて私は手許にあつた「川柳雑誌」二冊を同君に進呈した。ロンドン帰りのわれらのプリンスが川柳をお読みになる日、これはかならず来るだろう。いや必ずきて貰いたい」と私は思

天皇さま

皇太子さまの話が出たから天皇さまのことにもふれておこう。軍隊時代、それも戦場の生死をかけたぎりぎりのどたん場で、私は二度も天皇陛下万歳と叫んで死んでいく兵隊の最後をみた。天皇とは大したものだな、とそのたびごとには、胆に銘じたものである。小学校のころのこうした、こんな最後の陣中美談をよく耳にし、眼にしてきたそのイメージが、こころもなまに自分の傍らで演じられようとは……そんなせいもある。随つてわが身が敵弾を食らつたときは、息あればかく叫んで死なねばならん義理みたいなものを感じていた。ところがである、いざ私がその通りのことになつてみると、おふくろや女房の顔ばかりが眼先にちらついて、實際の話が天皇様どころではなかつた。沙汰の限りといわれればそれまでだが、その通りなことなのだから仕方がない。

さて、その天皇様とじかにお逢いできることになつた。天皇様四国巡幸のみぎり、それを報道する記者の一人として。四日間というものはまことに、天顔咫尺に拝すかどころか、すぐ傍らにへばりついて歩いた。ふくよかや張りのある艶々とした顔。黒いしがし少しお白髪のみじつたこめかみのあたり、豊かに盛り上つた厚味のある顔の辺。まぎれもない生きた壮年の人間の顔であつた。その顔を横に拝して歩いていようち私はたとえようもない温味が、しつとりと身うち流れ伝つてくるのをどうすることもできなかった。遺族の捧げる戦没者の位牌、母子寮で子を膝にして臥す未亡人などの前で、天皇様のこめかみにはきまつて軽い律動がきた。号泣を押してこらえた人々に見るあの律動。そうかと思つとがんぜない子供や愛すべき禽獣の前では、思うさま明るく微笑される唇のあたりの愉しげな表情、私は天皇様という貴人を全くそこに感じなかつた。この何気ない人間の姿に、実をいへば私は感動してしたのである。その人ご自身が天皇様であつたから――。

こんな天皇様と知つていたら、いまわのきわの私も、なんとか万歳とまではいかなくても、天皇様とそなたと一言ぐらいは口をついていたかもしれぬ。



川柳塔

平塚市 木村 孤浪

たかろうとばかりしてると母機嫌
代議士を招待したと十幾度

顔振れを見て招待に行くときめ
苦笑して忘年会費の追加出し

まともには嫁の朝寝も云えぬ御代
酔うと父美しき天然をうたひ出し

尼崎市 水谷 鮎美
差押へ養豚場の春がすみ
鳥取の蟹終電に乗せて去に

愛の果卑怯に死んだのも哀れ
日雇の皆んな背中を見せて飯

大阪府 西 尾 菜

金策に出たまゝといふ記事となり
ナイロンのペラ〜に似た世相なり

御察し下され度といふ断りやう
池田市 戸田 古方

落第の醍醐味なんか知るまいが
デリ貧になるとは知らず職をかえ

君恩があほらしなつた天皇記
よらば斬るぞ時々ゆうてみごうなり

ホノル、市 内藤 草一郎

そも〜は酒戦で勝つてからの仲
本妻に聞けば何時かは戻ります
パトロンと切れていよ〜美しい

イエスともノーとも言わずコンバクト
春だなあー上着かゝえて撮らさせる

ワイキ、動物園にて
ホノル、市 岡 曉舟

日本鶴今にも折れそうな足で立ち
簡易化は司会者皆んなやつて除け

ホノル、市 白砂 旋風
自家用車されど税金拂はれず

道頓堀これがゆんべの川かいな
みめ佳さに大阪へ来てかきを割り

ブレイクも貴金属部は静かなり
オーライオーライ呼吸の合うのもおもしろし

一とゆすりしてスターリン遂に死す
久しぶり会ふたに無口もの言はず

首相の失言問題
大阪市 須崎 豆秋

馬鹿野郎が四百何十人も居り
退屈な近代小説ばかりなり

咲いてるにカレンゲ二月のまゝだつた
愛猫ミィの死二句

春の夜が更けるよ猫の北枕
ネズミなどしらぬやさしい猫だつた

二月二十一日の雪
三センチそこ〜積むと飲みたがり

大阪市 丸尾 潮花

金一万円これが女の貯金帳
バラ〜にされて見たらと思ふ日よ

女子大を出てから三味を弾きはじめ
生活力社長は派手な服に見せ

大阪市 北川 春巢

丹前で男は市場籠を提げ

ボーイフレンド遊びに来てる應接間
世辞言えぬとこも似て居る夫婦にて

下関市 櫻川 不水
紙芝居出菌なり凄く流行つてる
もうあかん胡麻塩落さうか

大阪市 武部 香林
鐘三つあつさり主婦と答えたり
白浜を二枚買ったは羨やまれ

岡山市 大森 風来子
シェードのあかり算数馬鹿らしく
一押でなびく女で物足らず

看護婦の業務を越えたおもてなし
女房はひびがあつたを主張する

大阪府 木下 幽王
客足はまばら親父は寝てしまひ
割烹着の一番白いのがあるじ

招き猫一匹ぐらいへ客が来ず
死顔の美しそうな人に逢ひ

下関市 弘津 柳慶
家族連れで出れば社宅の嫉妬する
かばかりの土産に女よろこんで

八代市 佐野 ト占
困つても他人は助けて呉れざりき
白粉のはげた娼婦に見送られ

京都府 大鶴 喜由
原稿の通り話せば角があり
温室咲きが机の上でふるえてた

何日の間に老けしすれ逢ふ人若く
土産より妻てう休待つてゐた

なやみも喜びも旬にして忘れけり



パチンコがあまり出過ぎて気がこがめ
皮肉や、過ぎて出世のじやまになり
アブレが多く多数決で破れ

山雨棲血に染まる日も筆をこり
吹田市 野本 吞水

いつの間か妻云う穀に馴れてゐた
日本の下駄をしつかり履け吉田
札幌市 山根 白星

チャンスなどなくて世俗の底に居る
街角の白衣へ迂回する心理
母上に虫の知らせのある客死

七輪を疊に上げる友が来る
あげくの果てはお茶漬を恣い
出張で浮かす予算の淋し過ぎ

子が五人あれど昔の思想にて
奈良県 飯降 白香

雛菓子を供へて夢をこりもどし
ビルの窓郷愁の瞳が街をみて
山口県 長野 井蛙

役得が酔ひつづれたで部屋を替え
忘られた晶で大根も花をつけ
競輪へ客をとられた街の愚痴

甲斐性もない辯義理を立てたがり
京都市 間島 青丹子

水遊びしたくて洗濯手傳ふ子
ブラットを駅長と言ふ巾で行く
團体の世話好きらしく旗を持ち

一人子の親の期待へ氣の弱く
大坂市 麻生 梨里

だがしかし理想ですよと云い足せり

愛と言う言葉をならべ詩人逝く
大坂市 上田 春柳

青写真理想の家の廣ろかりき
大坂市 松江 梅里

かつぎ屋は睨まれめしやは見逃され
花ばさみだけが立派な未生流
落ちぶれて筆まめさんと音もなし

椿の花の落つるが如く誠になり
姫娘の知らせ賀状の隅に書き
中元の効果出張命ぜられ

イヤリング初心な男を寄せつけず
鳥取市 河村 日満

母なれや火の要心をわざとに
まな板の疵母親も老いしかな
借りた金母倍にして戻しに來

小遣ひをあげるうれしさ母を呼ぶ
兵庫縣 家沢 薺花

退職の弁当箱を子がもらい
朝寝して実演程の夢を見る
三寒に縮み四温は風邪に寝る

冷戦のボスは双方入れ替り
合服も早し冬服重くなり
東 京

喫茶ともバーともつかず女いる
乙姫という名の女給にぼられたり
なやましの日よ郊外は花盛り

三者から見ればとぼけた恋に見え

安賣りをされて儂い恋だつた
又雨かなどと結局寝ころがり
徳島縣 姫田 夕鐘

旅役者鮎を釣る間があるのなり
成り下つてやろか女恐ひ事を言ふ
酒やめてけわしい心の日がつゞき

備かるか知らんが拾い屋にもなれず
争えぬ歳パーマに見る白髪
廣告の様な番傘貸してくれ

かけ替えた軸見てくれた半月目
速達が庭に落ちてた花婦り
大坂市 塩浜 一路

手土産が惜しいと思ふ所用すみ
悪筆の紹介状を恩に着せ
兵庫縣 榎南 夏六

予期してた女が居つた終電車
大阪府 西 いわを

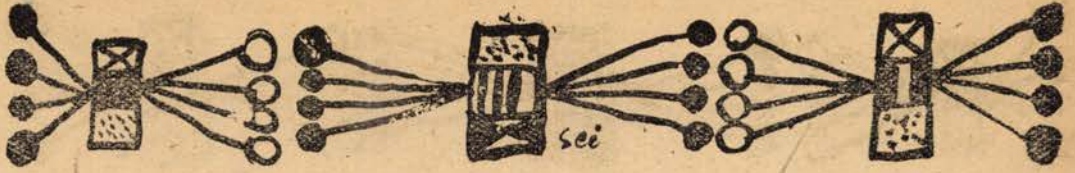
閑職に居れば氣易うものを言ひ
抱かれてからの女は弱かつた
岡山縣 服部 十九平

墓地移轉跡に觀光ホテル建ち
白酒へオールドミスが酔ひ痴れて
重役がナンバーワンに振られて來

岡山縣 大森 娛句樂

僕文けに居残れと言ふ酒があり
晩酌の猪口にも春の舌ざわり
読み直し母に手紙の意が通じ

苑女藏ぐ



仲人の嘘半分に聞いて決め
迷信に事よせ日取りちと延し

熊本市 有働 芳仙

食い逃げじやアないかと思ふ皿の数
接吻を奪われそうな霧流れ

俺と云う顔で映画へ五人入れ
ラッシュアワー白衣のギターかき消され

香川県 大西 迷窓

春が来て乙女は窓に腰をかけ
良心と闘ふおんなと酒の席
安産を願う心で泣むつるべ
樂しさわババと呼ばれる日の近く

下関市 坂田 良坊

平たく言つて済むこと済まぬこと

下関市 石川 侃流洞

どん底へ居ても育ちのある氣性
絞る氣の握手と男知らずいる

大阪市 安岡 珊枝郎

あゝもしようこうもしようど年を取り

広島県 山田 季賛

恋知りて巢立つ学徒へ職がなし
酔いに酔いおでんや出れば春の雨

煙草の火バン／＼にかかる夜の街
ぶら下り卒業したが職につき

岡山県 水田 千石

コンクリート工事が蟹の氣に入らず
向き合つて散歩をしてる蟹の恋

大阪市 山本 葉光

消炭にまらず亡き姑を想ひ出し
差引をすると零とは淋しいね

闇物資積みこみ船長髭を剃り

ジレンマも愉しからずや浮世なり

大阪市 東喜 久堂

世に遠く律義な男忘れられ
告別式向いのラヂオ遠慮せず

大阪市 鈴木 天貧

他人のアラ探す性根を見下げられ
もうこんな歳かど生年月日書き

倉敷市 木村 千客

酒池肉林ア、人生のうらかいな
僧正は緋の座布團へ自若たり
交際がよくて高利もつかいなれ
方便という嘘俺は嫌いななり

税務署は赤字の裏も知つており
わが党のために右往し左往する

岡山県 田垣 方大

ガム噛んであちら氣取の保安隊
下役はみんなきれいな妻をもち
税務吏になつて童貞すぐなくし

石川県 那谷 光郎

名門で稚拙な筆も額になり

風邪とのみ信じて居たに訃報くる
持参金たんまりつけますピッコの娘

診断がまだつかないに治つて來
夢に見た事も知らせる母があり

モンペなら解かずに置けよ再軍備
私生兒にふれず産婆の世辞のよき

床屋政談今日の社説を借りたらし

石川県 野村 味平

ソロパンを弾けば擔ぎのおもしろし

大阪市 木村 水堂

俸給の高い順から出張し
つきあひで酔える男を羨まれ

熊本市 花岡 英子

さすらいの旅へ詩人の腫がきれい
チンドン屋ほ、紅程におどけてす
良心をすこしまひさせ生きてゆき

退職

堺市 八木 摩天郎

この月はこの月のみの折腕
家建ててあの世の母の齡数へ
照る日曇る日わが身さびしき
税務吏へたゞやるような淋しさだ

一家をば支へる靴けふも持ち
勝つてると思つて死んだ人いとし

ネクタイの風にまかせたやうな恋
乳母車こんどは姉に成つて押し

高槻市 福田 丁路

國會のやつさもつさで名を知られ
せゝらぎへ足を伸して恋に酔ひ

岡山県 水谷 谷水

女給ふぜいに議員が不実なじられて
出戻りのツボ出たがらぬ章魚に以て

春が來た見よ縣道をデモが行く
トロを押す舍弟もおつて名譽職

産婆さん泣かせてこゝはモハン村
細長うやつとりますと隅で飲み

ベタ惚れが妻子ある身を恐がらせ
漫然とまた公約をする氣かい

チヂだつてもつと愛嬌があるよ君



藝術に生きる氣離別妻迫り

おぼしめしフ、ンとマダムさりげなし
嘲笑を浴びつばなしで儲けとり
長時間レコードかけて老らくの
しつて居るのにおち様と呼んだりし
借金を詫びるに一家死んでまで
三面を血でべとくにしそな世
御抄ですなと税吏むきなおり
貴方つてオンチなのねと酌いでくれ

岡山県 相原 一善
雨足をちつと見つめて宿で暮れ
花生ける時は妻にもある根氣
臍舌の返禮ならん穢になり

岡山県 田村 藤波
皆お持ですかと窓口念を押す
窓口は見習らしい手間が取れ

岡山県 岡田 夜潮
呉々も留守を頼んでストリップ
焼香にがらのよく無いのも坐り
窓口へ手をさしのべる金指輪
夜遊びを大目に見てる生さぬ母
嫌いでもないらしいのえ下駄を脱ぎ

岡山県 坂井 三葉
もう一度採用通知を確かめる
市警音楽隊
警察にラツパを鳴らす職もあり
母の来る便りへ布圍借りて来る

岡山県 政田 大介
出しやばりの意見少しは入れられる
春霞山羊も少しは眠くなり

赤坂町誕生

田満き買われ町長に押し出され

岡山県 白井 三林坊
勤続十年ストに組する暮し向き
解散が今度はお家藝になり

香川県 安倍 寛子
見切品のように三女四女嫁づかせ
へそ繰りを貸せと夫がにやりとし

大阪府 青柳 扇子仙
入学へ踏切があり池があり
宮さまの視察はあすという掃除
スターリンとうとう死んだ死によつた
あいのこを孕んでもた予算外
好きだつた頃の素直な妻でなく
さかり場の腐つたシミを好く作家

茨木市 下山 清潮
たんぼへの如し自由党散りかゝる
代議士と言へど御金を氣にしだし
月給を代弁してる靴で出る

岡山県 本田 恵二郎
ベストセラーいさゝか見栄で読んでみる

大阪市 眞鍋 一瓢
金貸しも慌てる程の正直さ
耳垢をためてアブストラクトの詩
天分のやうに淫賣して暮し
手切金触れまいとする手へ渡し
露路裏のこゝも大阪食わす店
止めて呉れる人がまだない娘の笑ひ
膝の猫且那への嘘聞いて居る

大阪市 永田 六竜子
手の荒れも希望につゞく若夫婦

豊中市 村上 ゆずる

乳母車泣くまでつゞく立話
男盛りというに義足でギターひき
積んで置くだけの経済雑誌来る
銀行の手紙これにも判を押し

鳥取市 森本 法泉子
商人の眼に役人の無駄使い
方言を隠せばゴコチない電話
何もかもメモする男哀れなり
虎視眈々狙つた席は廃止され
いざと云う場合やつぱり男親
景色には眼もくれぬのが定期券
院長の子も肺病で死んだとか

大阪府 日置 文笑
農村にもあつたミルクとパンの朝
商人に期限を切つて欺まされる
ス首相うちの経済までゆすり

大阪府 丸山 三平
共に飯み共に働く妻と生き
焼き盡す嫉妬の妬女持ち
恋情も知つてゐますと賣春婦

大阪府 佐野 牛歩
塵芥車春日の兒に氣がほぐれ
筋かいの角が夜つびて眠らせず

大阪府 後藤 梅志
土木部長案外吐のない男
子のけんか泣いた子置いてみんな逃げ

大阪府 小池 しげを
鉄失い蟹は平和なあわを吹き

大阪市 山崎 帆加夫



んへとい

堀口塊人

小林義矢満という川柳家があつた。港区のある紡機製作会社に勤めて居た。まことにお人好しであつたから争議団の幹部にさせられた。大正の終りか昭和のはじめ頃、労働者西尾末広はなやかなりし時代の話である。これを本人から聞いた時、私は大変だと思つた。どう考へても相手が悪い。その会社の重役はある紡績会社の社長の兼任で、業界でも有名な強気な持主であつたからである。はたして争議は惨敗に終つた。その頃の紡績界には隻手空拳、無一文から成功した人が多かつたのみならず、それが日本資本主義発達の史の一部を成す様な連中であつたから豪傑奇傑変人等の寄合でなか／＼の壯観であつた。このT社長の如きも、その一人で相当なものであつたらしい。たとへば、はじめ

て活動写真を見たのは、既に財界の名士となつてからである。別府の一等船客の為に余興があつたので、彼は甲板に出た。白い幕が張つてあつたのを、風よけと考えたから、おもむろに映写機の方へ顔を向けて映写を待たさうである。この人の部下に、Aという専務があつた。碁、将棋、玉突き、何でも好きであつた。そして勝たなければ承知しなかつた。ところが相手がわざとらしい負け方をすると怒つた。そこで玉突きのお相手をする連中は、すれ／＼に玉をそらして負けるように努力した。そこで習性となりお相手連中は普通人と争う時にでも、すれ／＼に玉がはずれてどうしても勝てなかつた。T社長はA専務に毎期自分よりはるかに高額の賞与を与えた。資金的にはワン

マンであつたにもかゝららず賞与だけはそうしなかつた。けちんぼと言われる大阪の事業家にも、こんな半面があつた。

ある社長は、出勤するとなぐちの下駄に履きかえて、靴を大切にした。そして、女工員といつしよに風飯を食べた。その米は台湾産の等外米口の中でもそ／＼して食べにくかつた。そこで、こつそりともう一度飯を食べに街へ出た。

今を時めく吉田側近の一人の親父は綿花商であつた。容貌怪異にして、相場に負けると支払が悪いとの噂が高かつた。ある紡績へ先物の棉花を契約したが、空売後相場が暴騰したので履行出来なくなつた。ある日「相場に負けたから勘忍してくれ」と、新聞包みを出してM社長に頭を下げた。社長は「負けたんなら仕方がない」と中味もしらべずに机のひき出しへ入れた。「何故中味も調べずに受取つたのですか」とたずねたら「あの男からこれ以上取れるかい」と笑つて済ました。中味は所有土地の抵当権設定の關係書類であつた。

何としても奇行で有名なのはG社長であつた。巨万の富を有しながら二銭の夕刊を買い事にもやましかつた。北浜から難波迄、バスは二区で十二銭であつた。値段を聞いてから六銭の市電に乗換えた。という話が新聞に載つた。早朝に出社して、自ら棉屑を拾ひ集めた。新聞記者が、「社長在社ですか」とたずねて来た。「社長は留守や」と、平然として応答した。この棉にまみれた老爺が、社長自身であるとは流石の記者にもわからなかつた。卓上の風呂敷包みから、公債の利札らしいものがちらと見えた。「社長ずいぶん公債をお持ちのようですね」と誰かが言つたら「阿呆らしい、これ皆利札でつせ」とひろげて見せた。それは全部小片であつた。彼はこの利札を切る為、特別の裁断機を持つていたとの話であつた。それほど金持であつた。老人だからよく涙が出た。鼻紙はもつぱら新聞紙であつたが、それをスチームでかわかして二度も三度も使用した。ステッキをコッコツと突いて古典的な事務所とアメリカ風な自宅とを往復したが「ステッキの減るのが惜しいから、地上に触れないうようにして居る」と悪口を言つた者もあつた。息子が東都に遊学して居た。某大学へ通学するに足る学資は与えられたが、それ以上、遊興の資までは与えられなかつた。社長はさる地方銀行の頭取を兼任して居たが、経営はY専務に一任してあつた。息子はこゝに眼をつけた。そして、約束手形によつて学資の不足分をその銀行から借入れた。重役会議の席上へ、不良貸付の一覧表が提出された。頭取は黙々として見て居たが、「専務さん、こゝにえらい、イキな貸付がありますなあ」と笑つた。

本町のある有名な問屋、丁稚制度が存続して居た頃の話である。田舎から出て来た少年お目見得がすむと、伊勢織の着物に角帯前垂掛の服装、善吉とか良吉とかいふ呼名が与えられる。少し様子の上少年は、すぐに芦屋や御影の本宅勤務を命ぜられ、とうさん、いとさん、こいさん、などのお供をしたり、掃除をしたり、時には台所で豆をむきながらつまみ喰をしたりするようになる。店つとめる者は、使走りや掃除や荷造などをするのが、普通である。店は女人禁制であるから飯抜きも男である。膳番、風呂番など、特殊勤務の当番がまわつて来ると丁稚は炊事助手となつて、ざこばや天満や骨屋町へ飯糰男のお供をして買出しに行き、生ぶしやら、ちりめんじやこやら、高野豆腐やら湯波やら大根や人参の相場を知る様になる。副食物はおまわりと云う。朝は漬物のみか汁があればよい方である。風は一皿おまわりがつく。夜も亦然り、膳番はその何十人分かを盛りつける。時には、番頭さんのおまわりと丁稚のそれと区別する事もある。しかしこんな事ばかりが丁稚の仕事ではない。泉州の晒屋から入荷した小巾木綿を一反づつ改めて紙で締める。京都や伏見の染色屋から入荷した加工綿布を製品しながら柄の組合せよろしく包装して、輸出用の木箱に積

め、釘を打つて、インボイス指定のマークを刷り、一個や二個なら丁稚車と称する猪車に積んで運送屋まで持込む事もある。地方廻りと称して市内の小売商へ小額の商をするようにもなる。そのかわり、夜鳴うどんの味もおほえ、千日前の常盤座へ尾上松之助の活動写真を見に行くようにもなるのである。勤務成績が良好なら、徴兵検査が済むと番頭さんになる。この時善吉は善七と呼称が変わる。そして羽織の着用が許される。店によつては丁稚、手代、番頭と三階級にして善吉善助善七と呼びさらにその上に別家格として善兵衛の名を冠するところもあつた。

番頭さんになると、いよ／＼販売の責任を持つ。輸出商なら川口や神戸の華商を廻る。第一次大戦中の日本貿易はなやかなりし頃である。ちよいと背広に着換えて、上海、天津、大連、浦塩までも出かける。中には印度エヂプト迄も足を伸ばす。英語や支那語は少々怪しくても、商売と女の話なら何とかまとめてみせますと、善七どんなかなかの活躍である。併し、商売は大きい月給は如何にも安い。酒と女の味を知る頃、えてして、使い込みがはじまる。不都合があれば、ぼつさり臍首になる。退職金の如きは元より零である。二十年三十年勤続すれば、のれん分

けと称して、分家独立する制度のたのしみも、こゝらあたりで産児制限が行われたのである。

M問屋のおえはんは、こんなにして育つた立志伝中の社長を夫として、共々に苦勞の末、未亡人となつた人である。そして、店を二代目の息子に譲り、自分は芦屋の別宅に女中の五人も使用する楽

ぐに中味を取出し、空箱はていねいにしまつておいて、次に、どこかへ、つかいものを、をする場合にはこれを使用して、空箱代を節約した。また店の者から、お菓子の様なものより、だし雑魚や、昆布や干切大根のような、おまわり、として利用価値の多い物を、貰う方を喜んだ。老後のたのしみは、

金沢市 安川久留美

同舟近詠

露の臺の拳わかもの努力かも
野芝居に本物の花ふりしきる
竹の子の皮剝いでいつ迄も女中
投げられた道がミルクの御育ち
ピクニツク茲で「ひばり」の盤廻る

松山市 前田 伍健

たしなみでざんす婦人代議士化粧
葱坊主たまには蝶もぶら下り
御神像かくにあぐらの氣が咎め
般若心経写すにいつか声になり
勝負師は自己哲学を信じきり

隠居の身分となつたが、なか／＼

毎朝の新聞紙にはさんである、広

告チラシの類を空箱に張りつけて

手文庫を作る事であつた。支那事

うまいと奉公人が飯をたくさん喰

変のはじめ頃、民間から防空兵器

つてきた。ある日、おえはんは、

二代目社長を呼んだ。「M助はん

この、おえはんは、たとえば、風

あ飛行機撃つもん一と揃えなん

ぼしまんね一とたつねた。「二十

七万五千元」とM助さんは言つた。「ほんなら、わて、半分出しますさかい、あと、店のもんで半分出しなはれ」と、拾余円を、手文庫から、ぽんと出した。それだけの話である。

日本の、いとへん、商工業はか

かる人々によつて建設されたので

ある。なるほど、彼等は異常に、

けちんぼであつた。併し、彼等は取賄したのではなく、汚職したのではなく、詐欺したのでもなかつた。最近の三等重役の如く、自家用車で、銀行へ金を借りに行くような事をしたのでもなかつた。自ら蓄積した金を、新事業に大胆に投資したのである。そして、よき家庭をつくりよき子弟を育てた。今では、全く前述の人々の二世の時代になつてしまつたが、人格圓滿にして、学識経験共に豊富なる二代目が、財界の各方面に活躍して居る有様は、いとへん、の壮観である。たゞ、いとへん発展をこれ等の人々のみの功績に帰するのはどうかと思う。その頃、英国のマンチエスターに於ては、女工一人の織機受持台数を十六台から十八台に引上げんとして、労働争議が発生して居た。同じ頃、日本女工の受持台数は豊田式自動機三十九台が普通であり、優秀工は更に四十八台まで一人で受持つて居

た。それから、紡機を止めずして切れた糸をつなぐ、小手先の技術は、外国で真似の出来ない天才的な奇術であり魔術であつたのである。

私は、昭和十七年この織機の話

を満洲藩陽の春日町の牛肉屋米久

で、すき鍋をつつきながら、女中のおちえさんから聞いた。おちえさんは以前に郷里の四国で紡績女工をして居たのである。おちえさんが無事引揚げたかどうかは消息がないから知らない。

瓶の銀山

大阪市長技師事務所
西橋一丁目四四番

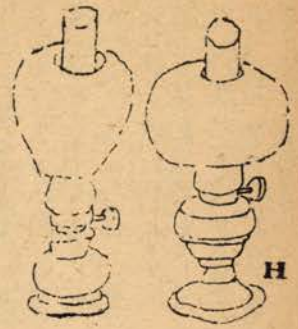
山銀硝子株式会社
電話四四七番

三吉

美顔水

美顔水

美顔水



川柳と俳句の区別 に對する私見 (二)

栗林農夫著「俳句と生活」を讀んで

戸田古方

五 現代俳句

大正末期からプロレタリア俳句

という一群があらわれました。現実のリアリティを申しますか。被圧階級の心の叫びが叫ばれていることは事実ですが、詩というよりスローガンのような句が少くありません。次に句をならべてみますので、それによつてわかることですが「終止め」と申しますがあまりはつきり断定してしまつていふせいかもしれません。現実暴露的で批判性はとほしいようです。「穿ち」らしいものをもつたものもあります、川柳の眼から見ますとも一つ稀薄な感じがするの俳句の写生の伝統からかもしれません。

これが仕事にありついた雪搔人

一石路

夫か 屋根屋根の夕焼くるあすも仕事

がない

星夜の職がないとがめられる

空車

べつとり濡れて今日の賃金が同じだ

日なたぶちまいていつた争議のピラだ

賀茂水

やがて検査される叫びを叫びつづけてゐる

河津葵

煙突が黒い血を吹きどうしだ

同

冬空のビルヂングの資本攻勢を見ろ

青木宏

踏みつけられてある一枚のピラが見のがせない

同

今に俺たちの世にして見せるとサク／＼稲刈る

鍛冶正

ゲートルの紛失が何故自殺しなければならぬ兵卒なのか

夢道

遺族の食へなくなつたことも戦勝塔にきざみつけろ

新井夜雨

「層雲」「戦旗」その他にのつて

いる句で「俳句と生活」に採録されて

解消問題が起つてくるのですが、それもなづけることです。自ら

解消をいながら反動俳句の跳梁

に後髪をひかれています。

著者栗林氏等は雑誌「俳句生活」

によつて解消論に反対し運動の再

建をはかつたとあります。その句

というのは

銭湯で嬰兒もまた資本主義社会

に育ちゆけ

曇れば地べたも冷えまさり炭俵

編みつく

貯水池に身売りする部落の表情

が枯れそめる

横山 林二

なんの漁もない沖を軍艦がぞろ

ぞろ通る

彌十郎

大陸へ着いてボンとやられて村

もつと人聞らしいものゝいゝ方が

出来ぬものか……ひかれもの

のなきごとの如く……」

こゝろまで来ているのもありま

すが、やはりうがちはなく、ユー

モアも、おかしみも批判性もない

たゞの俳句らしい写生にすぎませ

ん。そして色濃い象徴性を伴つて

います。

カラ／＼と活字の音が胎児にひ

びく

古家 樫夫

秋風に食えよ食器に音をさせ

びく

石橋辰之助

さりげなくたむむ昇給辞令かた

し

島田 洋一

この辺の句を見ていると季節感の

あくは抜けたやうです。しかし

プロレタリア俳句の行きすぎを

是正するとやつぱり花鳥諷刺的な

第一の伝統に近づいてくるよう

です。

さらに著者は結びの一章として

「民族文学としての俳句」には先

ず人民的伝統の発展として第一の

伝統の影響の残っている句があげ

られています。

火の中に死なざりしかば野分満

つ

檉 椰

冬日の妻よ吾に肋骨無き後も

いくさよあるな妻生に金貨天降

るとも

草 男

税署の花圃に「皆さんの花です

大切に」

同

次近代主義傾向ということば

でよばれているものであります。

近代の自我を中心に展開してい

る。すでにのべて来た第二の伝統

の系統であります。

誠首交渉ヘレルうずめてぐん

ぐんゆく

漆畑吐志男

職場放棄けさの工場巨大なる

山に雪ぎつしり罐は炎えている

津田 正之

生活給のカーツ黒板にポロポロ

描く

えつぞおがわ

藤給袋投げつけたし災天どこま

でつづく

杉山 青磁

マツチの火かばうてのひら鉄に

おう

山田 保光

第二芸術として解消すべきだ……

俳句こそ

「ところがどうだ彼等は川柳のあ

ることを知らない……俳句こそ

だけ共感が得られましようか。私

はこの頁へ次のようなかきこみを

しています。

「ところがどうだ彼等は川柳のあ

ることを知らない……俳句こそ

第二芸術として解消すべきだ……

俳句こそ

だけ共感が得られましようか。私

はこの頁へ次のようなかきこみを

腹がへつた上鉄板ぶつんと切れ
る 佐藤雀仙人

大分川柳らしい句になつて来て
います。川柳の方からみてもいた
だけそやな句もあります。両者の
ちがいは知性の稀薄でしょうか、
やつぱりおかし味がなく、うがち
も見出せず笑いはさらにみえませ
ん。批判しても、しかつめらしく
にがむしをつぶしたようで叱られ
ているようです。川柳の笑の批判
のするどさはみられないのです。
川柳は人生を喜劇と見ているが俳
句の方はどうもそらういきかねるよ
うです。

俳句の伝統はかくながめて来ま
すと第一と第二の伝統のからみあ
いの上にきざぎ上げられているよ
うです。したがって芭蕉も蕪村も
一茶も子規も碧梧桐、虚子、の影
響もあるわけがあります。
俳句は手軽いが平俗で芸術性の
低いものであつてはなりません。
大衆に迎合するのではなく、大衆の
文化水準を引上げるに役立たねば
ならないといわれています。さら
にそらうした文化水準の高い生活を
可能ならしめる世界の実現を助け
る働きも要望されています。
そらういろいろの条件の下に
著者が現代俳句の水準としてかゝ
げているものは左の諸句でありま
す。

日ある野や秋雷獄にぶつかれる
石橋辰之助
妻が買い置くヒマシ油の小さき
橋本 夢道
瓶と夏が来る

作業衣干せば風の中雑草花つけ
神代 蒔平

徹夜してきれいだなあと見たコ
スモス 小沢 太子
まだ自然を押しつけています
夜学生よ君には戦闘場よりない
のか 石橋辰之助
来て見せよ少年工となりし手を
老いても子に従わぬ母の頑固の
故郷の秋茄子 橋本 夢道

青斑の西瓜買わずうまいにきま
つておるぞ 橋本 夢道
東芝の仲間よさよりなら元気で
働いてこい 神代 蒔平
妻の断牛肉今日の食卓に
中台 春嶺
鉄工が縫えば兵めきかなしき手
江崎 美実
工具を貸す女工霜焼けの手にて
貸す 上村白塔波
パネも折れよ失業者君のベチン
漆畑吐志男

コ

不 朽 洞 句 帖

麻 生 路 郎

あゝ僕も 汽車を下りしにゆくところなし
（橋本 夢道）
勞基法無視した老いの一徹さ
金の音がザクザクと音のせし頃
正月も三日の客は勦焼にされ
（芝居 有作）
千日前界限でまだ会える氣もする

雨ひかる屋根屋根戦争はもうい
やなんだ 同
弾丸はもうつくらない訥々弁の
爪噛んで 江崎 美実
再軍備絶対反対胸まで焚火
かしはらかつを

屏にへばりついた闘争ピラ年を
越す 小沢 太子
胸うたる七夕笹に平和の二字
田川飛旅子
これらは詩なんだろうが、どう

も燃焼が不足しているようで説明
の文字が眼につく、やつぱり何ん
べんかいつた事ながら写生が生ず
ぎて批判反省にとぼしいせいでし
ようか。
「俳句と生活」の記述はこのへん
で終つています。私はこれから眼
を川柳側に転じてみたいと思いま
す。

六 現代の川柳

初代川柳柄井八右衛門以後の選句
は多くは句主の名もなく柳多留百
六十七編におさまつて明治時代に
入りますが、その末期文化文政頃
は大に墮落していたようです。そ
れは大衆の手に野放しにされすぎ
た結果、当時の教養の低さのため
か月並風な歌しやれにおちた感が
あります。

少くとも明治以前の川柳は全く
第二の伝統の色濃いもので人民文
学というか、町人文学の尖端を行
くものでしたが詩としてすぐれた
ものは比較的少いようです。
明治以後のものはそれにくらべ
ると詩的になつて来ていること、
狂句排撃の影響も手伝つておかし
味がへつて来ておられます。
そこで現代作られている川柳に
はどんな種類があるのかというこ
とからながめてみましょう。
江戸川柳即ち柳釋川柳という流
れと詩性をもりこんだ詩川柳であ
りましょう。

川柳の榮祥地ともいうべき東京
では今でも柳釋好みの川柳が行わ
れています。含宙軒徳川夢声氏な
どは「川柳はなれのした川柳のみ
徒らに幅を利かせ、私共がイタン
に堪えない」といつています。
その一方関西に起つて来た新川
柳は一樣ではないとしても大休詩
川柳であつたようであります。
いずれにしましても、さきに俳
句史のなかでも度々述べましたよ
うに「おかしみ」ということが川
柳のもつ一つの特長であることに
はかわりがありません。そこでこ
の「おかしみ」の分析を笑の分析
からはじめてみようと思ひます。
笑ひの心理学や、生理学は省略
して、これもせんだつての成人学
校の講座で話しながら思ひついた
ことですが次の様な種類にわけ
てみました。

一、くすぐり笑ひ
二、頭での笑ひ
三、心臓と胃袋での笑ひ
四、泣き笑ひ
五、全身の笑ひ、絶対的な笑ひ
最高の笑ひ
これは實際的に見ているので、
科学的なわけ方ではありません。
くすぐり笑ひといふのは笑ひ意
志のないものが脳の下か何かをく
すぐられて無理に笑う場合です。
川柳以前のものとして狂句とい
ものがあつては悪くはる、後家の
變
聲
竿えらびするうち柳曰になり
という昔のものから現代句でも
Democracy (でも暮しいい)
Democracy と月日すく
Frail in car (満員車) 二合五勺
が汗になり等とつまらんものが奇
智のみを売ものにして横行してい
ます。
次の頭での笑ひといふのは「穿
ち」の句のことをいふのです。
「穿ち」といふのはなるほどと人
をうなづかせる理智の所産であり



路郎選

貴男がその気ならと臆繰りがばれ 広島県 黒本 芳泉
 写真機もあの時喰うたまゝ買へず
 群雀に我田ならすも鳴子引く
 特種をもう知つていた散髪屋
 旦那でも取るか湯銭にさへ困り
 お互の昔にふれる倦怠期
 落着いた迷子は泣こうともしない 大阪市 石川ひさみ
 顔寄せた話花見のことでした
 娘さかしく又母親を言い負かし
 百円を借るに男も嘘をつき
 だし雑魚で女一合飲んで去に
 級長にする氣の母でうるさ過ぎ 愛媛県 藤田 博人
 上役の犬の仔だから貰つとき
 苦節十年未だ芽の出るを信じとり
 育児法暮しの程度違い過ぎ
 悲しみを越えて女に智慧がつき 東京都 石居 高志
 主來るを待てば今宵の月の良さ
 出張先遊廓だけは見て帰り
 税務署が來てると客に書いて見せ
 軽犯へボスの効き目も有りは有り 今治市 長野 文庫
 混血も日鮮なれば目に立たず
 無駄と知りつゝ署名させ署名する
 酒の席不可能なのを可能にし
 中学へ行つてスターの名を覚え 大阪市 吾郷 玲人
 もう一度確めて買うう・S・A
 宝石部密輸の記事を寒う読み

靴下を舞妓が脱がせたまで覚え
 テレビジョンこれが名士の面構え 大阪市 石田 沐天
 藝人のようにクイズの娘が喋り
 花に得て虫に失せたる恋なりし
 春や春浮かれ宗教に掌を合せ
 つまらない話聞き手になるも旅 愛媛県 堀内 曉風
 御自由になさいと一寸逆う氣
 遺言を無視して株で儲けて居
 新宅が儲けて少し氣に入らず 大和市 岩垣日本村
 基準法小言も時間内に云へ
 腕組んで居れば税金かと思はれ
 急がない旅だ各停また樂し 貝塚市 堀井 一峰
 瘦せたいと云うは看護婦さんのこ
 選挙なりけりこんなお辞儀はかりと
 恋でさえ順番のあるものと知り 大阪市 板東千代美
 娘とは名だけ三十二にもなり
 男みな見返すほどのものもなく
 おみくじを笑うてみるも若夫婦 玉野市 渡辺あきら
 戦災でなくしましたと云えす
 百株がスターリンの死をかなしめり
 お轉婆にハツキリ嫌いだと云われ 岡山県 小林 夢介
 あの顔で二号世の中面白し
 片仮名で二号旦那を投票し
 細り行く効目嬉しい美容術 大和市 戸田 悦子
 純情の日記絵があり歌があり
 お酌して呉れる長女がいじらしい
 ペンを持つ時だけ貧乏苦にならず 大阪市 不二田 一三夫
 憲兵に追われた頃の写真見せ
 酷評を横綱ぐつと唇を噛み
 汝彼女を愛する牧師ちよびりダメを押し 大阪市 神谷凡九郎
 泣くツボをみんな教えた母映画

ます。それだけ誰にでもすぐわか
 り面白味も端的であります。
 輝くやもとより金に嫁せし身の
 劍花坊
 白粉の下は光陰矢の如し
 史城
 むかしむかし稼げば楽になりし
 とか
 豆秋
 ともかくもかついで歩く銀狐
 水車
 都会人エスカレーターでも歩き
 句沙彌
 一本の外はどうでもよいテーブ
 橙舎
 ハンドバック迷へる心バチつか
 栗
 心臓と胃袋の笑いというのは社
 会批判人生批判の句であります。
 社会はこんなもの、人生とはこん
 なものとの自覚から生れた句です
 悟りとまでは行かなくとも、ほん
 とろによい幸せな人間になろうと
 する人間努力の過程に生れるもの
 です。
 ケーブルの一番前に立つ若さ
 春菓
 誓沢をしつくしてから虫といる
 白楽人
 とうとう医者も安心立命をとき
 雅幽
 氣違ひが私のいいたいことをい
 ろ
 閑生
 本復をして辛竦な口をきき
 路郎
 本心を世間話にして帰る
 鮎美



妻の愚痴櫻ちらほら咲くと云う 大阪市 神谷凡九郎
 貸してゐる方が年始をして廻り 布哇 滝 純 香
 暇次第読みたい本に見る埃 同
 二時間も待たせて薬だけでよい 同
 あれほどに嫌な養子でまた孕み 岡山市 津田麦太楼
 白魚を値切つて顔を見あげられ 同
 こゝでまたも一度拗ねるツボがあり 同
 母校から税金のようにかゝる寄附 津山市 三木 香平
 湯加減を開けば夫人の声になり 同
 生き写しですと老妓の話好き 同
 メートル法へつんぽに成つて居る年、愛媛県 渡辺 曉童
 欄外へ的の違つた意見書き 同
 酒好きの話酒好き聞かされる 同
 石鹼屑女心のつゝましく 滋賀県 土守トン坊
 高校へ入る力が父になく 同
 嫁運のしみぐ、判る五十代 同
 当直の朝風呂贅沢とも見られ 福岡市 岩田十三楼
 税務署が来て棟上げも興がさめ 同
 写生されて居るとは知らぬ渡し守 同
 新入社女であつた目のくばり 貝塚市 竹内雨季舟
 ほめられる養子人にはけちくさく 同
 二号から市議府議とへし出世録 同
 先妻の事へ觸れまい飯の出来 津山市 田口今日坊
 博士号故郷の墓へ草が生え 同
 只の酒又飲めそうな総選挙 同
 花曇り云うてパチリと碁石置く 芦屋市 戸部 竜馬
 不機嫌な妻とデパート押され出る 同
 捨てに出る空籠春の陽をはじき 同
 ハンサムの兄へ妹の客多し 貝塚市 安永美美子
 教養があると思へぬ化粧して 同

お好焼試験のすんだ婦り道 同
 院長の趣味ラケットをみんな持ち 広島県 山田 桂角
 好きなようさせておくさ、恋冷めぬ 同
 黄水仙みたよな女嫁に欲し 同
 別居して唇濃く御外出 出石川県 杉浦 醉羊
 計のしらせ斗病五年の甲斐もなく 同
 税丈けは隣へ負けても黙つたり 岡山県 光好三四郎
 いゝなあと思ふ女の振り向かず 同
 一心に穴ほる大工冬に勝ち 石川県 金賜 歌聖
 病めば大工さんの働く音も苦しく 同
 曉鳥師
 僧に僧位あり争いのなまシヤバ 石川県 前田 義風
 布教僧声ごきりようを武器として 同
 インテリの哀れはものををり辛癖 豊中市 加納山茶花
 わからぬはなぐれ主義へ五十が来 同
 菜つ葉服軍需の株を少し買ひ 大和 小川 学
 罪の身にコルサコフ病うらやまし 同
 盛り場は杭打つ音も人呼び 貝塚市 高崎 雄声
 臣茂神天皇もありさうな 同
 曆では大安だつたのに拘られ 岡山県 藤井 呆声
 元氣ならえと一泊もせず去に 同
 スクーター社の財産として揃い 滋賀県 久保 和友
 臆病な男であつた古日記 同
 席順が氣に入らないが猪口は受け 岡山県 岡田 青果
 後から賽銭襪え投げ込まれ 同
 学歴の方が新聞種になり 石川県 山田 陽々
 見渡せば皆それん、春の色 同
 封建の親はやつぱり金を生み 赤穂市 川西 去水
 雨の晩乳呑兒が泣き山羊が泣き 同
 脱線をする氣でのむも四月馬鹿 岡山県 沖 一 糸

以上が人生批判の句例

こんな傷ぐらいと指はなかりけり 沐天

機械一台この一軒が喰いはぐれ 路郎

人と鯨鱈は油したくれ 不洋

役人の子はにぎくよく覚え 古川柳

施しをしてお妾は手を洗ひ 夕鐘

この人出みんな生きてるおそろしき 紅太郎

女中より犬が大事な家並ぶ 美知夫

敢て冒険をなすにあらず硝子拭き 大門

ノーパンでいけたらいつぞ涼し 豆秋

一も金二も金犬は無職だに 睡花

ポーナスへ借りてる金をよせてみる 港太郎

肩捨ひにつと笑つて怪しまれ 歌都路

親程に階級のない社宅の子 高峰

社会批判の句ですが、少し沢山引例しすぎたようですがプロレタリア俳句その他現代俳句と比較する素材のつもりもあつたのです。心臓といつたのは人間の自性の反性、更にいえば人間のもつ欲望の探求を意味しますし、胃袋は申すまでもなく生活、経済の問題から生れる社会批判だからです。



色電氣うそを言ふ妓の眉細し 沖 一 糸
 自轉車の稽古に出した古モンペ 高知県 岡本 元馬
 時計屋の弟子に時計を壊される 同 戸田 嘉一
 市場から出た風呂敷に水がたれ 大和 高田市
 米くれた頃の知るべを忘れかね 同 高岡 薫
 へそくりの株下らせたスターリン 京都市
 間借だよこけしのひなでい、だろ 同 大山 裾乃
 晩婚の例にいつしか原節子 米子市 同 小西 雄々
 たとへばと物の例に名寄岩 同 佐藤 房子
 食べ物の事にもふれる婦朝談 米子市 同 高橋 幸子
 文学が好きだと知つた髪型の 大阪府 同 富岡 青柳
 笑はれた犬でも貰ひ下げに行き 大阪府 同 森本黒天子
 容貌も條件にする世にもどり 同 谷 一平
 父母達者養子も達者牛も無事 大阪府 同 越智 一水
 歟の錆父もめつきり歳をこり 同 小島さぎす
 小使のお茶今日も亦委員会 大阪府 同 野田素身郎
 耕作が遅れてゐるに空氣銃 富岡 同 操子
 曲つた事嫌ひで今日を喰ひ兼ねる 大阪府 同 河楊 枕鐘
 新築へそぐはぬ人となつて住み 同 同
 ビクニック隣りもすしを巻く匂ひ 大阪市 同
 文化賞忘れられてるローソク屋 同 同
 青い眼の子も居る春のランドセル 今治市 同
 苦勞する事を美德にしてる母 同 同
 求婚欄病身でもとは書いてなし 貝塚市 同
 春浅き夜の語らいに炭を足し 同 同
 人以上持つてゐるのは子供だけ 倉敷市 同
 美人だけど造花のような娘なり 同 同
 お光りもゆらく手製のよもぎ餅岸和田市 高橋 同
 一回忌ごしもこゝに出たつくし 同 同
 貨物船瀬戸の霞に吸い込まれ 貝塚市 同

肺病が居るんだと指す松の丘 同
 嫁が来た後も姑一人産み 大阪府 同
 税務署の親切週間氣味悪し 同
 減になつた話ハハとわろてる 貝塚市 同
 ストーリーだけで病人満ち足りず 同
 ミーハー族あなどり難し百万部 貝塚市 同
 サンダルへまだ霜やけが癒えて、 同
 折提げて玄関までは来た足だ 大阪府 同
 凡人と凡人とゐて耐を飲む 同
 野心など無いよな顔で株を買ひ 岡山県 同
 春霞花見の服をねだられる 同
 一分咲きこれでも飲める花の山 岡山県 同
 お迎への母もぶらんこして帰り 同
 頰杖の本屋に積んだ春の塵 岡山市 同
 アトリエにモデルの膺も匂ふ春 同
 税務署の庭へ溜息置いて去に 岡山県 同
 寒い／＼が口についてるお婆さん 同
 春霞頭もやつぱり四月呆け 岡山県 同
 足並が乱れて議會元へなり 同
 行きづまりの真心がまだ忘れず 豊中市 同
 終電に顔見知り出来ふと怱し 同
 春さびし女患ら派手に／＼干す 島根県 同

N 君逝く
 春の日に淋しき壁の白さなり 同
 見舞状届かぬうちに死の報せ 愛媛県 同
 倦怠期だが妻であり母であり 同
 飼主に良く似た顔の犬が吠え 石川県 同
 進学を断念しました母一人 同
 日曜日腹の減つたのから起きる 姫路市 同
 帰つたら叱る心算が寝てしまい 同

泣き笑ひの句というのは古川柳
 でいえは
 南無女房乳をのませに化けてこ
 い
 にわとりがあくびをしたとつん
 ぽい
 チャップリンの喜劇や曾我廼家
 五郎の五郎劇にでも出てくる笑
 いです。私がすきでよく引く句
 に
 仕舞風呂一本足が飛んでくる
 大 門
 があります。が案外これが人生のほ
 んとの姿かもしれないと思いま
 す。
 曾我廼家に泣く涙あり借さぬな
 り 三 巴
 金を出して芝居を見て泣いて来
 て快感をおぼえる心理、客観して
 距離をおいて眺められるからでも
 あります。川柳がはげしくき
 びしい描写をしながら詩の一線を
 支えつゞけてられるのもこの客観
 と批判の結果でありましょう。
 最後の全身の笑いというか絶対
 境に次の諸句をおきましょう。
 君と僕そしてビールと桜ん坊
 路 郎
 君見給へ漢蕤草が伸びている
 同
 凡聖一如元旦のこゝろ知る
 同
 独りであふれた水の清いこと
 松 花
 夏の花もとの広さになつて暮れ
 四 塊



信じない仲居へ定期券を見せ 神戸市 松尾 天信
 夫の反対押し切つて出るクイズ 同
 手鏡へ三十路の小皺哀れども 和歌山県 美野百合子
 女でも自暴酒飲んで見たいなり 同
 稼がねば食へぬ手さする花曇 愛知県 岩川 寛虚
 パンパンも義足と寒さ分けてたち 同
 若い頃ヒゲが欲しいと思つたに 岡山県 長尾、越馬
 今日も又五人家族へ振るハンマ 同
 割箸を取る妻の手が荒れてゐる 大阪市 永田都詩子
 飯一つだけぬ夫と病臥てわかり 同
 ぼん／＼へ收入役をもつて行き 和歌山県 瀬戸 凡太
 いゝ花見でしたと夜は雨になり 同
 血を賣つた悲哀もあつて卒業し 山口県 田中 秋穂
 かくし藝出せと云ふのを待ちかたて 同
 助太刀は一氣にジョツキあけちよ 米子市 勝田 正郎
 面割りにほくる一つが逃げられず 同
 國民の信頼があるなど虚勢張り 貝塚市 小田 柳叟
 巢と呼んで寝るばかりなる部屋を持つ 同
 整理した店主の人柄惜しまれる 大阪市 岡 山子
 二君に仕へずと停年思へども 同
 少年老易く等とパチンコばかり 大阪市 友田 楓士
 演説の出来る女で嫁き遅れ 同
 此の雪じや雀の足も冷めたかろ 鳥取市 泉 北 鳥
 大寺餅焼けた堺を見て戻り 大阪市 丹波 太路
 調節を尻目に悠々双兒産み 岡山県 佐々部 満佐志
 脱獄囚靴を買つたが運のつき 和歌山県 谷口 喜久治
 へんくつが賛成皆んなほつとさる 出雲市 久家代仕男
 両親をくどく息子に成つており 出雲市 日野加壽緒
 日本髪結えば亡母に良く似た娘 岡山県 池田 昌子
 さらわれていると母は知らざり 宮崎市 野口卯之助

傷痕章無情な人出旅の町 津山市 菱川 正美
 暴言もてんやわんやでけりがつき 岡山県 中尾 貞教
 衆院解散
 うるさいと思ふ選挙にしてしまい 熊本市 高野 宵草
 帳簿の字徹夜した日と云う乱れ 奈良市 絹下 南天
 誰こでも話せて未亡人かたし 愛媛県 村上 旭童
 看護婦の胸のあたりに話しかけ 松江市 原 章 二
 行き過ぎた豆腐屋官舎から呼ばれ 岡山県 穂北 二郎
 母さんは二十才でお嫁に來よと云う 和歌山県 岸本 木魚
 引越荷子供の力あなぞれず 大阪市 松元 利行
 身を任す氣が温泉へ行きたがり 岡山県 池田 古心
 蟹でさえわが身を守る爪を持ち 岡山県 大塚美能留
 守れないくせに約束念が入り 和歌山県 西 兎 山
 立居にも掛声のいる母の老い 和歌山県 久保田 青竹
 やもめの身を心配する長女なり 和歌山県 貝岐 瀑子
 他人様の様に実母に礼云われ 尾道市 渡辺伊津市
 一徹が子にそむかれて金で生き 大阪市 深見雅樂太
 ヘソクリをがっかりさせる スターリン 大阪府 中辻 橋村
 入学の支度予算はさうに超え 大阪市 笠井 勢波
 要求も受入れそうな娘の腫 貝塚市 芝原 洋史
 マルクス論目次を読んだ、けの才 大和 中谷 卓司
 卒業にやせ入学にちよこまり 富山県 島村 克兒
 きかぬ氣の所親父によく似て來 大阪市 横山 翠風
 優等の遺兒を佛に申上げ 金沢市 篠原古戰場
 未だバスの通らぬ実家へ歩かされ 大阪市 岡田 有泉
 独り身の智慧は造花をさして病み 大阪市 飯田かずを
 ねえパ、と呼ぶ鼻声にまるめられ 大阪市 末松 耕兒
 株のこと詳しい男にある貧相 大阪市 舟川 傾舟
 卒業をしたらと頼る子胸を病み 岡山県 國正田 吾作
 履歷書に書けぬ美貌を口惜しがり 大阪府 山本青道心

お隣も閉めていよいよ虫の雨 一兵
 水門はちつと耐へて冬の底 鬼 仏
 君雲と話す心になり給へ 鮎美
 此段階の句を目して「俳句みた
 いや」とか「無季の俳句や」とか
 いうのです。がこの事についての
 べることがこの一文の主眼点とな
 りそうです。
 路郎先生は川柳の定義の要諦と
 して「十七音字中心の人間陶冶の
 詩」と述べておられます。人間を
 どうして陶冶するか。
 これは俳句も同じでしょうが作
 句はあらゆる観察と視野をひろげ
 ることからはじまります。川柳に
 於ては観察はいつまでも観察でな
 く批判に転じて來ます。自らに対
 しては反省ともなります。自嘲と
 もなるでしょう。
 ものの本質から、人間の本质、
 自己の本質と探求の眼は前進しま
 す。その窮極に於ては人間のはか
 なき、弱さ、至らなさに達するの
 です。川柳は笑いの詩と申しまし
 たが、この人間本性の発見からく
 る笑は自嘲とでもいうべきもので
 ありまして、人間完成の最も下に
 しつかりと積まれなければならな
 い礎石なのであります。私はこゝ
 まで來た時川柳の宗教を感じるの
 です。



検温はダリヤの色もほめて行き 大阪府 鈴木 風鈴
 スクーターもあきてそろ／＼ 春さなり 豊中市 水野水茶花
 キツスシーン妻の吐息を見逃さず 貝塚市 永吉 喜好
 茶ダンスの犯人父ちやんもの 一人 岡山県 岡本 薫翠
 怒らなくなつたも歳と片付ける 貝塚市 野中 稔一
 屋上で恋語つてる腕カバー 大和 高田市 戸田麻由美
 どちらへど訊かれ妾宅とも言へず 鳥取県 亀崎 漫歩
 齡問うて野暮な男にされちまい 兵庫県 吉原 紅月
 満員車好きな貴女は遠ざかり 貝塚市 辻 圭 宏
 留守番を気軽に引受け飲むつもり 大阪市 兒島與呂志
 道樂は何でもやつて今はねる 貝塚市 高崎 竹声
 やめば悲しや坐るけいこにはじまる 石川県 眞絵田秀穂
 おちてゆく人と金ををみくらべた 石川県 工作 能爺
 告知板二時間待つて未練なし 大阪府 松村 浜小
 驚の声がしそうな山に降り 大阪市 中峯 芳扇
 身賣する人もあるのに堅すぎる 大阪市 高島 敬秋
 高級品の賣娘モデルの様に立ち 岡山県 森川 東南
 女とは四十に成つてもあまへて来 大阪市 池戸 桃村
 連休も子の汗をする 律義者 奈良県 木村 喜勇
 夜学から帰へりも待つは母一人 吹田市 橋本 幸男
 いゝ話受話器持ち替へ座り替へ 大阪府 小谷 凡盆
 臨終を他人事でなし生き抜かん 大阪府 浜井 眞砂
 利にならぬ話に添乳寝てしまひ 大阪府 横倉慢太郎
 職業にありつき恋人欲しくなり 大阪府 前田 夢郷

病床愚感

森彦 六

先日、水谷鮎美先生より病
 床の小輩を慰める〆と題する句
 稿を戴いた。愛情溢るゝ墨跡を
 拝見してその喜びは筆舌に尽す
 ことの出来ない感動であつた。
 どれだけ吾病心の慰められ励ま
 された事だらう。小輩川柳を始
 めてから足掛け三ヶ年有余にな
 るが句績は一向に上達の跡が見
 えなない。これは如何んともし難
 い事だが川柳を通して人間の誠
 と愛に触れ知る事が出来、これ
 からはどうしても遠ざかる事が
 出来ずに懲りもせず川柳に励み
 親しんでいる。

川柳によつてどれだけ己の心
 に平和と希望を齎たらして呉れ
 た事か、今や世界情勢は冷戦の
 最中、若し万人が川柳を知りそ
 して川柳を愛することが出来た
 ならば世界平和の実現も決して
 夢物語ではないだらう。去る三
 月十四日の国会解散の実況放送
 を聞いたのであるが、あの騒音
 はなんたる事か。国家の最高機
 関である国会をそしてそれは吾々
 国民の中から選ばれた代表者の
 集りである。心ある人は選んだ

人自身即ち国民全体の責任だと
 云われるかも知れないがもう少
 し大きい観点から考えて見よ
 う。今度の解散は政党自身の内
 紛が起因と云われている。恰か
 も夫婦喧嘩による離婚沙汰の様
 なものであつて迷惑を蒙むるの
 は国民自身だ。夫婦喧嘩は犬も
 喰わぬと謂われている如く此の
 様な内紛は実際詰らぬもので
 あり、お互に大きな損失であ
 る。結局この様な内紛は唯愛情
 の缺如が然らしめたと云つても
 過言ではあるまい。そして国会
 に於けるあの野次騒音に就いて
 も結局愛と愛から生ずる敬が缺
 けているに起因している。それ

麻生路郎著 水武書房版



川柳を研究したい人々に好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新
 指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」
 から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心
 者が本書を繰くことによつて直ちに川柳作句のエッセを会得する
 ことが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書
 である。敢えて一説を薦む。

B 六版 (二二二頁) 改正定価一三〇円 送費 十六円

取次御注文は 大阪府住吉区南瓦町西五丁目二五 川柳雑誌社

好評噴々

一路集

招待

高鷲 亞鈍 選

リヤカーで敬老会へ招かれる
東風頻り梅信伝え友を待ち
二十年未だ招待もされぬ椅子
招待の人数を要ときりつめる
招待状左記のとこだけ読んでおき
招待の日附が消えたのを貰い
失恋を招待状で確認す
鶏があるから一本下げて来い
写真機も持参されたし招待状
招待へあさませいけど風を抜き
挑まれてゐる招待と知つてゆく
招待券今日は名取りの資格で来
招待席時間は虚ろに消えてゆき
招待の席でライバル顔合はし
招待へ子供を連れて来て泣かせ
招待の隣りも借りたモーニング
招待へ女房も入れた酒の味
顔役が招待席に悠々と
招待は主賓ばかりがねぎらわれ
見忘れた人も招待席に居る
招待席吾が子は隅のプログラム
万障を繰り合す程の会でなし
寄附金の順に招待席へ掛け

寛 嶺 南 天 日 正 悦 雅 茶 寛 谷 柳 柳 潮 香 香 竹 緑 雄 伊 辰 満 鉄 香 良 七
虚 南 天 道 子 菜 々 水 水 花 林 朗 々 津 始 年 児 平 坊 面 山

招待をされて祝儀を包み変え 木魚
要領を得ぬ招待へ彼も居り 芳泉
招かれて不束者を一人連れ 三林坊
招待が続き赤字も猶つゞき 一朗
招待席躰けの糸をソツト抜き 高志
佳・いやなやつ招きもせぬにやと来 不二
佳・招待状兄の気持で来てほしい 風の子
佳・氣を使つてゐる招待へ氣を使い 方大
佳・招待へ二度目の妻を連れてゆき 葉光
佳・パーティーのお招きドレスをにしよう 菜々女
佳・最後まで招待席は空いており 惠二朗
人・三度するおじぎと吐は別なもの 十九平
地・ロソクもそなへて新居客を待ち 水菜女
天・招待状両家の紋がもう並び 谷水
惠二朗

朝寝

友淵 貴山 選

朝寝することも遺言のように云い 牛歩
作業服朝寝の街を見て通り 青柳
寝過ぎた音たてゝ居る洗面器 一瓢
パパとママの朝寝へ僕達腹が減り 不二
朝の陽のまぶし文士はねがえりし 英子
朝寝した支園靴が出て居らず 一善
家督まだ譲らぬ父へ朝寝をし 満年
朝寝坊時計の針をちと進め 勢波
朝寝など目も呉れないで妻化粧 美能留
鳥籠へ朝寝を託びる餌をやり 雨水

日雇の自嘲ある日朝寝する 三林坊
朝寝する女房に頼る不倖 十九平
幸か不幸か朝寝を起す者がなし トン坊
旅の宿朝寝と知つた心付 香平
朝寝かと思へば一家心中にて 七面山
朝寝する廊下をしきりに往来し 茶々
ノーマネー朝寝も出来ぬ程に晴れ 万右人
朝寝した眠は靴ペラだけが知り 悦子
次の間に簪が待つてゐる朝寝 鉄児
春眠を覚え検温間に合はず 流水
特権と心得男朝寝する たかし
朝寝して今日はデパート明日芝居 雄声
鍵だけを外し朝寝をする習慣 とよ
朝寝坊或る日冬眠しとうなり 葉乙女
二十九の卑屈さみせて朝寝する 谷水
健やかな母に朝寝の幸もなく 葉光
哀れにも妻の願ひは朝寝とか 南天
朝寝する自由も持たず妻は老ひ 万右人
枕元英和辞典もあり朝寝 古戦場
朝寝など減相もない魚市場 桂角
朝寝した証拠の目くそつけ歩き 巨船
悠々と仮病の朝の新聞紙 芳仙
朝寝する身をひまわりが笑つて居 水茶花
朝寝する癖が抜けずにガード下 夢介
小人は不善を為して朝寝する 嶺南
弊表出す決意朝寝をして出掛け べん郎
朝寝してゐて結構でない身分 一点子
朝寝した靴に昨日の空弁当 高志
日曜のふとんは朝寝の父が上げ 竜馬
朝寝など知らぬ男で家を建て 薫翠

本社五月句会

時一五月二日(土)午後六時
處一大阪市天王寺区下寺町二丁目
(市電下寺町・日本橋三電停前下車)
於 光明寺
柳話 麻生路郎
句評 水谷鮎美・戸田古方
来会歓迎・鉛筆持参
川柳雜誌社句会部

濡れてゐるデツキの音を聞く朝寝 伊都志
朝寝する夫の寝顔に初老あり 雨季舟
乳呑児へ妻は氣兼ねぬ朝寝 水堂
朝寝した若さがほしい歳になり 島浦
朝寝した元氣ネオンの灯に染まり 意坊
立合で朝寝の家へ巡查入り 破天荒
約東の朝寝ひもじゆう床に居る 日満
朝寝からいつも守衛に顔がきき 越鳥
旅の宿朝寝の湯氣にしたる唄 嘉一
佳・朝寝して二見ヶ浦にのこる悔 山子
佳・朝寝して夢は職場をかけたぐり 芥花
佳・朝寝するのへ有りたけの布団着せ 夜潮
佳・そこまでは似てくれずとも子の朝寝 房榮
佳・朝寝する床で偉人の伝記読み 田吾作
佳・宿慌てさせて朝寝のつづく部屋 香林
佳・倦怠期朝のフテ寝もある生活 光郎
佳・佳・あいつ又朝寝と幹事だけ残り 太路
佳・佳・三文の得を喰うて朝寝する 呆声
佳・寝たばこの朝寝に肚がたく出来 鮎美
軸・夕刊も朝寝の床へ投げ込まれ 貴山

野人語

麻生路郎

賣名



お早うございます。お早うございます。ありがとうございます。ヨクノ、ヨクノ……ヨクノ、ヨクノ、フカゾウでございます。ヨクノ、ヨクノ、フカゾウ、フカゾウでございます。どうぞよろしく願います。お早うございます。ヨクノ、ヨクノ、ヨクノ……ヨクノ、フカゾウでございます。こんな声で、それもガア／＼云う雑音で毎朝眼を覚まされる。売名と云う言葉があるが、コレなどは売名の好サンプルであらう。

素は何をしているのか知りもしないのが、勝手におなじみのだの、ちもとのだのと連呼をつづけている。そしてトラツクはまたたく間に、この町からあの町へと走り去つてしまふ。このエタイの知れぬ名文も、ここまで書けば、コレが独立日本の選挙風景だと云うことは、明々白白であらう。この名文、イヤ迷文を、選挙人も被選挙人もジツクリと読んでもらいたい。トラツクに大根や人参を積込んで、ダイコ、ダイコ、ニンジン、ニンジンと連呼して、町から町を終日走り廻つたところで幾ら売れるだらう。おそらくトラツク代もあがらぬだらう。町の人々にしても、品質や値段も判らずにダイコやニンジンを買うほどノンキな人はいない筈だ。尤もダイコに宴会がつき、ニンジンに幾らかお金をつけて売ると云う手もあるの、腐つたよるな、ダイコ

川柳の独創

諷刺は通されぬ

安川久留美

明日ありと思ふ心の仇桜、夜半に嵐の吹かんものは(親鸞)世の中は三日見ぬ間の桜かな(古俳句)桜から柳へそれる落し差(剣花坊)夕桜とんぼ返りがして見たし(路郎)——斯う古今の歌や句をよんでいると、矢張り「川柳」の方がいつち悲観素を消している。即ち諷刺の中に微笑が浮ぶ、「鯛ほめてけうは鯛の花見かな」という月並の俳句になると些か桜も陽気に思われようが、昔の風流人は樂觀素に乏しいようである。尤も花の中で、桜は美しいが散れば無惨で、むしろ噫無情の方が先に立つのかも知れない。然し川柳はあくまで「笑」を元素としている。余り泣きことは遠ざける、泣くにしても「泣く／＼もよい方を取るかたみ分け」と詠まれている。この句の中には喜びの意がふくまれている。あく迄諷刺を遠がさぬ。之れが川柳の本道かも知れない。「螢が泣いているやうに光る」といば一つの詩ではあるが、句では「屋の螢籠」を部屋の片隅へ持つて行くかむろの吉原情緒には、古川柳の味があらう。俳句が詠むべき秋の季節にしても、「面ざしは馬に似ているきり／＼す」だの「押へれば芒はなせばき

り／＼す」などはどれも川柳としての妙味がある。川柳が俳句の季題を捉えて川柳化しつゝあることは、研究すべきであらう「君ヶ代をきいてるやうな菊の花」小次郎「河鹿々々せめてめしを欣ばせ」私「天の河一別以来彼の祖先」鶴足など孰れも俳句でなく川柳なのである。その内容を見て川柳の独創を識るべきであらう。(四月二日)

路郎を語る

岩崎愛二

私が、川柳というものにそもそも関心を持ち始めたのは、昭和のうんと始めの頃で、ある寒い冬の夜、今、伏見町にある「与太呂」が新町でやつていた頃、麻生路郎多喜健一、高尾楓陰と私が、ぶぐをつついた時に始まる。その時、路郎先生大いによつばらい、与到り、短冊、色紙を買いにやつて、随分書きなぐつたものだ。それでも足らぬか、ついに、「与太呂」主人のカツボウ衣の背中を、こちらに向かせて酒とろりとろり大空の心かもとやつつけてしまつた。今年の冬は、「与太呂」に出かける機会が比較的多かつたが、いつか、主人が、当時をじゆつ懐して、カツボウ衣は、わてらのフロツクコートだす。あたり前やつたら、カツとしまんねんけど、何や

句の洗礼

吉田水車

路郎先生の川柳生活五十年記念短冊展覧での先生の御快心作百六十余品は名実共に充実そのものであつたのは勿論であります。私は会期中四、五度拝見に上り心いく迄そのだいに味に浸り得ました。まことに句の洗礼を受けた心地がした次第である。もとよりつねづね誌上では拝誦しているものの様々の装いのもとに一堂に集つたのは近來の壯観で又斯様な好機もそうざらにはないので会期の十五日間は短か過ぎるとさえ思えた。先生がひたすら歩まれた川柳道の五十年は真に尊いものと思う。その成果を今回の展覧に示されたのに違ひはないが、それが勿論全部ではなく、もつと大きく深いものをのこされて居り、しかも猶熱情の赴くところ川柳の正しい在り方と後進の指導に寧日がなく

やニンジンでも売れるのであろうが、ソレは聞取でしかないのである。

詳しくは選挙人も被選挙人も考へるべしである。と云つたところではもう選挙も済んで、あとの祭であらうが、選挙はこれぎりでおしまいでない。

科学よ後退せよ

特に名所でなくても、農家の軒先などに、満開の桜を眺めるとはのぼのとした気持がする。満開もいゝが葉桜もいゝ。

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ汽車を下りしにゆくところなし

と云ふ啄木のうたを口ずさみながら、田圃道をブラ／＼歩くのもいい。

歩くこと云うことは、歩くそれじたいが愉快だ。今の世のあわたたしさでは、仕事をしていると自動車で走つても、ナンテのろい自動車だろうと思うが、いつも自家用で走つては、人間世界のホントの面白さは味えない。テク／＼と歩いてみると、いろ／＼なものにブツ突かる。遊覧自動車で、観て来た東京と歩いて観て来た東京とは違ふ。科学の進歩は或る意味に於て人間を不幸にする。スターリンが死んだので未亡人のへそく

り株がなげくのも或る意味での科学が進歩しすぎたからである。水素バクダンとやらが、出来ること、ヨロイ、カブトに身を固めて、「ヤア／＼、遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、われこそは垣武天皇の後胤、清和源氏のチャク流、何んのナニガシの家のその又家の……」と名乗つてチャン／＼バラ／＼と竹槍でシノギをけづつたところが、なつかしくなるのは私だけではない。

昔も疎開はやつたが、今の疎開とはワケが違う。科学の進歩も物によりけりである。病氣予見機政治家選択機などが出来たらサツ便利であらうが、失業者を沢山出すような機械などはあまり進歩させぬ方がいい。一日働けば一週間はラクに食えれば、桜が咲いたと云つて、「酒は飲め／＼飲むならば」と唄つてもいられようが、一日半働かぬと食えぬと云うて、大学の先生までがアルバイト探しにうき身をやつす世の中では、ノシキにテク／＼と歩いていられない。従つて人間としてまことにお気の毒な終点に着かねばならぬことになる。無意味な殺人もやらねばならぬし、のぞみしからぬ戦争もやらねばならぬことになる。人類を幸福にするためにはある種の科学よ、後退せよ。と私は叫びたい。

柳界展望

斯界の養展純化にいそしまれて先生の健勝を心からお祈りしてやまない次第である。と同時にこの意義ある行事の企画実行に当られた委員の諸賢に深く感謝する。(二八・三一七記)

▲本社四月份会は午後六時から下寺町の光明寺で開催▲大阪

市警視庁警察学校講堂に於て一川柳に就いて講演(四月十五日午後一時から二時四十五分迄)▲大阪

通信病院川柳会は四月十八日午後二時

から三階図書室で開催▲南区医師会

文化部杏林川柳会は四月廿一日午後七時半から生々庵居で開催▲大阪

市警視庁警察学校講堂に於て四月廿四日午後一時から二時四十分

まで川柳に就いて講演▲南海電鉄川柳会は四月廿七日午後六時から粉

浜の親和寮で開催▲川雑堺支部會は四月廿九日午後六時から九間

町山之口の摩太郎居で開催▲赤坂町誕生祝賀川柳大会(岡山県)は四月

十二日十時から赤坂中学校で開催以上何れも路郎主幹出席▲川雜

淀川支部會は三月二日香林居開催▲川雜島之内支部會は三月十

七日千町町機部運送店階上で開催▲川雜備前支部會は三月廿二日

に久米雄居で開催▲広島川柳會の第二例會は三月廿五日に広島貿易

館で開催▲第七回京浜川柳大會は四月廿九日正午横濱紅葉園で開催

▲大阪市電交助会川柳部會は四月廿一日午後五時から事務室で開

催▲青蛙川柳會句會(伊丹市)は四月十三日午後五時半から三菱電機正

門前健保會館で開催▲花まつり川柳大會(京都市)が四月五日午後

一時から枳敷邸(臨池亭)で開催▲福島県下川柳大會が四月廿六日

午前十時から郡山市金透小学校北通川柳會館に於て開催▲全信川柳

大會(第七)回が五月五日午前九時から上林温泉慶表閣で開催され

る。會費一〇〇円(風食持参)兼題「理窟」登至路選「乳」今日花選「遺り

繰り」久邦選「浮き沈み」典夫選各三句、送句先長野県須坂局区内太

子町高峰柳兒氏宛▲京都川柳作家協會主催で第六回京の春川柳大會

が四月十九日午後一時から東山高台寺で開催▲泉南川柳大會(青森

県)は四月廿九日午前十時半から東奥日報社主催の下に三戸町関根

三戸塾大広間に於て開催▲弘前川柳社主催の第八回泉下川柳大會が

五月三日午前九時から弘前市代官町東部公民館に於て開催される▲

「国文学解釈と鑑賞」の七月月号が庶民文芸としての川柳の知識を特

輯、路郎主幹は「川柳の味」を執筆された。愛読を請う。発行所は

東京都新宿区払方町廿七至文堂▲川柳「路」第一号が四月一日に

創刊された発行所は横濱市南区中村町四ノ二七八横濱川柳社▲藤本

▲關華氏(京都市)は四月四日金光教本部の春の大祭に詣られ金光が頼りを寄せられた▲吉田機司氏(市川市)は四月三日NHKの婦人の時間で川柳の話を放送された▲梶川蘇堂氏は吹田操車貨物主任に榮転され大阪府三島郡味舌町鉄道宿舎九号の二へ移られた▲塚越迷亭氏(東京都)は四月五日栃木市太平山の川柳大會へ出席された▲川上三太郎氏(東京都)が徳島県へ旅行された帰途来阪されたので、七日午後四時から生々庵居に迎え、生々庵、路郎、腹乃、梨里の諸氏等が七時半頃まで歓談された。三太郎氏は入時過ぎの夜行で帰東された。

BKだより

BK川柳の會が、三月号に既報したように趣味の葉の時間として日曜の朝九時十五分からの放送になったので、一般聴取者にとつて朗報であるところをこんでいたところ、更に、放送時間を延長三十分間として放送回数も増やし、多少川柳に就ての選者の意見なども述べることもあるとの話に、大いに氣をよくしていたところ、突然逆転して毎週月曜日朝七時半から四十五分まで第二放送で放送されることとなつた。放送時間と云い曜日と云い、早くから働きに出る人達を全くオミットすることになつた。趣味の葉と云う以上せめて日曜の時間にして欲しい。



平忠盛

富士野鞍馬

桓武天皇の第五皇子・葛原親王の御孫、高望王臣下となり、始めて「平」の姓を賜つた。その子が鎮守府將軍國香で、それから六代目が、讃岐守正盛。その孫が平忠盛である。「海賊平氏」「伊勢平民」といわれていたが、忠盛は京都へ出て、朝廷に仕えた。

伊勢平治なせおこつたかげぬ也 (タル四九)

この忠盛によつて、平家全盛の基礎ができたのであつた。

永久の頃(一一一三)白河法皇が御寵愛の、祇園の女御

のところに廻られる時に、忠盛は此面の武士として、お供

に加つていたが、梅雨時で雨が降つていた。女御の宿所の

近くにお堂があつて、そのほ

とりに、頭は銀の針のように

手には何か異様に光るものを持つた、鬼のようなものが動

襦で洗つただろうと古川柳は詠んでいる。
この化けものを、斬つたり射たりせず、捕えたことは、思慮深いとおほめに預つて、園の女御を忠盛に下された。

祇園女御は天皇の思ひもの (タル一〇八)

その時女御は妊娠中であつたので、若し女の子だつたら朕の子にしよう。若し男の子だつたら忠盛の子として、武士にせよということであつた。ところで男の子が生れた。

その後、白河院熊野へ御幸のお供をして、紀州糸ヶ崎で休息の時、忠盛はそこらの藪にあつたムカゴを袖に一ばい入れて

いもが子はほほどにこそなりにけれ (タル四一)

と申上げたら、法皇はただもりとりてやしなひにせよ (タル五)

と附けられたという。それで古川柳はまた詠んでいる。

とほしかけ油坊主の賞にくれ (タル一五四)

喰いかけの芋忠盛(下さるゝ (タル二一八)

忠盛はおみやをそえて拝領し (タル四三)

忠盛はついでに滑石を買ひやり (拾 六)

忠盛へ芋がらとにも下される (タル五六)

男の子だつたので忠盛は喜んで。院の子くと忠盛抱きあげる (タル二二五)

芋の子をただもりたて、菜にする (タル一四二)

ところが、この子が夜泣きする

と、法皇はきかれて夜泣すとただもりたてよ末の世に

清く盛ぶることもこそあれと一首を下された。それでその子を「清盛」と名乗らせた。

忠盛はつこにおえぬ子をもらひ (拾 六)

いもが子はやりての手にあわぬ也 (タル十六)

忠盛は里子がよほどためになり (タル三九)

はたして、芋の子「清盛」から平家は榮えたので

むかごはびこる二十余年なり (タル二九)

芋が子も二十余年は頭だち (タル三五)

芋が子も頭立つては二十年 (タル四三)

芋が子の墓もはびこる二十年 (タル六三)

芋の子は赤旗さつま白旗 (タル九四)

芋が子も鳥羽へはえごくあたるなり (タル三五)

大阪が生んだ世界の

アサヒビール

等と詠まれ、榮華は二十年間であつた。「鳥羽」は、鳥羽芋と鳥羽御殿との狂句である。忠盛はその後、長承元年(一一三二)鳥羽上皇の御頭痛平癒祈願の爲(一説には後白河法皇御願)三十三間堂(得長壽院—蓮華王院)を建立に奉行した。

お頭痛の平癒が寺の号となり (タル一一四)

それで三十三間堂を「頭痛山平癒寺」と称したという話もあり、その功によつて忠盛は但馬の國を賜り、三十六才で昇殿を許された。

ところが殿上の連中はこれ



をねたみ、その年十一月二十三日、五節豊明の節会の夜、忠盛を闇討にする計画をしていたが、忠盛は、これを知つて、鞘巻の木刀に銀箔の張つたのを、節会の席で抜いて見せておどかし、無事なるを得た。(公宴に太刀を佩するこゝは禁じられていたので木刀にした)

大萬川柳から

殿上の闇に明るい太刀をぬき
(タル五二)
 銀箔であかりをたてる闇の太刀
(タル二〇九)
 鼻殿の木太刀ねたみの念を切り
(タル二一〇)
 さや巻の木太刀で闇の難を除け
(タル一四)
 等と「平家物語」を川柳に

作つてゐる。
 忠盛にも恋があつた。その相手は、仙洞に仕える女房である夜、月の絵の描いた扇子を忘れた。それに対してその女房は
 雲井よりただもり来たる月なれば
 おぼろげにてはいわじとぞ思ふ

と詠んだといふので
 宮中へ忠盛月をすてゝ行き
(タル四九)
 と川柳は作つてゐる。この女房に生れたのが薩摩守忠度である。
 また、頼朝や牛若丸等の命乞いをした池の禪尼は忠盛の後妻で頼盛の母である。

禅尼の慈悲は一門のあだとなり
(タル四二)
 等々の句もある。
 忠盛は、白河、堀川、鳥羽崇徳、近衛の歴朝に勤続して四位上刑部卿となり、仁平三年、(一一五三)五十八才で終つてゐる。

「小鉢」 (第十三回)

- (人) 均一の小鉢場末の灯をはぢき 岡山 谷水
- (地) 小鉢もの借りを払ひに来たらしい 岡山 方大
- (天) 小鉢屋で逢うた芸妓にたかられる 兵庫 千舟
- 「出前」 (十四回)
- (人) さゝめ雪出前船場の風にそみ 大阪 梅里
- (地) 叱らん先に出前のせんべい 大阪 栗
- (天) 横坐り今日も出前の皿ばかり 岡山 方大
- 「若旦那」 (十五回)
- (人) 商魂は侮りがたい若旦那 岡山 方大
- (地) 若旦那しにくい話俺れにさせ 和歌山 木魚
- (天) 若旦那よし著つたるく 大阪 豆秋
- 「貸浴衣」 (第十六回)
- (人) 貸浴衣着を打つ組は静かなり 岡山 愛秋
- (地) 貸す浴衣死んだ娘のとも云へ 岡山 百々平
- (天) 貸浴衣バンドをしめて散歩に出 岡山 満年
- 「人違ひ」 (第十七回)

「二次会」 (第十八回)

- (人) 二次会へ汚職を意識して出掛け 岡山 十九平
- (地) つきあいの二次会時計はかりな 大阪 春渠
- (天) 二次会へ恐妻型は袖にされ 和歌山 一角
- 「風呂」 (第十九回)
- (人) 底板がボンと浮いてる旅の風呂 大阪 豆秋
- (地) 番台に預ける程も持つてあず 藤山 芋花
- (天) 父さんの長湯心配して覗き 岡山 三ツ葉
- 「新柄」 (第二十回)
- (人) 新柄へ小声で宅が居りますの 岡山 谷水
- (地) 新柄を男が選れば派手になり 尼崎 三司
- (天) 新柄を着ても主人は鈍感な 大阪 梅里
- 「おくれ毛」 (第二十一回)
- (人) おくれ毛を見せぬ気性へ云ひ寄せ 岡山 大介
- (地) おくれ毛を氣にして医者へ起き直り 岡山 八ツ茶
- (天) おくれ毛へ家裁同情的になり 岡山 方大
- 「気短か」 (第二十二回)
- (人) 気短かへ先づ結論を申し上げ 岡山 意坊

「初詣」 (第二十三回)

- (人) 初詣鼻緒のかたい下駄をはき 尼崎 三司
- (地) 祈ることなくてめでたい初詣 岡山 八ツ茶
- (天) 神国にまたなりそうな初詣 大阪 葉光
- 「籠詣」 (第二十四回)
- (人) 退院も近し空籠捨てにやり 大阪 文蝶
- (地) 籠切りライバルの手さ僕の手さ 岡山 谷水
- (天) 籠詣もろくに切れない亭主なり 藤山 芋花



たっぶり
愛嬌たっぶり
B1 たっぶり

疲労と脚氣に
タッポリ
錠・庄・無属注



い
の
ち
あ
る
句
を
創
れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼開催月日及場所記入▼締
切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社四月句會 (大阪市)

四月四日 午後六時

於 光明寺

花見より句會の方がよいという熱心な
人達によつて、会場は満員の盛況であつ
た。路郎師の柳話は華やかな句と淋しい
句を比較して其文学的価値を話された。
鮎美氏と古方氏の対談句評は大方・一球
・抱逸・春葉・十九平・芳仙・春雄・水
車静臥の諸氏の句を挙げて短評を加えら
れた。席題・兼題の披露の後、本村水堂
氏が不朽賞優勝カップを把持された。

(幹事)

出席者 路郎・塗杖・丁路・夢裡・摩天
郎・喜久堂・紫香・少将・抄兒・賀峰・
潮花・一瓢・牛歩・勢波・梅志・静馬・
ひろし・凡九郎・古方・番茶・修三・正
斗・水茶花・英一・みのる・十四郎・葉
光・省三・六童子・都詩子・生々庵・雅
葉・香林・鮎美・木声・以兆・一点子・
黒天子・恒明・淀月・啞醉・帆加夫・天
貧・雄声・狸仙・しげを・圭三・賢二・
淡舟・美雄・貴山・水客・三司・胡蝶・
水堂・正則・栗・梨里・霞乃

兼題 「かけ出し」 麻生路郎選

かけ出しと知れて相手にしてくれず 賀峰

かけ出しにまぐれ当りのある恐ろま 一瓢
 かけ出しの頃ばつかりの回顧録 しげを
 かけ出しは家へ帰つて息をつき 英一
 かけ出しのくせにしゃべりまじこか 葉
 かけ出しの無口がいやに氣に入らず 潮花
 かけ出しの魚屋と見て値切りに出さ 天貧
 かけ出しの医者看護婦に使はれる 省三
 ひと知れずかけ出し下唇をかみ 塗杖
 かけ出しは何んでも記事にしたくなり 静馬
 かけ出しと見えぬ背広に提げ靴 水堂
 かけ出しが私心をたね酒を買ひ 潮花
 母の死をかけ出し舞台の袖で聞き 玲人
 かけ出しの悲哀詰所の隅に居る 塗杖
 大学出小店員に指図され 抄兒
 かけ出しに超過勤務の日がつつき 香林
 馳出しだから書き浮世の痛いさこ 玲人
 かけ出しは純情なとこ買われる 凡九郎
 黒天子 黒天子
 摩天郎 摩天郎
 狸仙 狸仙
 玲人 玲人
 啞醉 啞醉
 紫香 紫香
 都詩子 都詩子
 夢裡 夢裡
 同 同
 摩天郎 摩天郎
 賀峰 賀峰
 少将 少将
 水堂 水堂
 路郎 路郎

兼題 「秘 密」 村松夢裡選

清貧の家に秘密も嘘もなし 雄声
 愛妻の秘密がばれた日記帳 雅葉
 友情は秘密に触れずおいて呉れ 省三
 入学へ妻の秘密の紐が解け 塗杖

此処だけの話を喋る声になり 抄兒
 先生の袖斗に見た髪斗袋 啞醉
 耳うちの秘密の半ばで笑い出し 葉光
 臍線りがバレて秘密に触れて来る 黒天子
 顔色で秘密を汲んでくれる母 淀月
 どなたにも見られたくない鍵をかり 都詩子
 もう知れた秘密笑つて黙否権 葉光
 吾が心だけの秘密をぞつと抱き 都詩子
 ぼつくりと死んで秘密のない男 紫香
 隠しても知つていゝ言わせる氣 賀峰
 何かしら秘密があつて容れられず 梅志
 娘の秘密まづ母親を悲しませ 胡蝶
 むづかしい顔で秘密を読む課長 修三
 東洋のプリンス秘密のない笑い 水客
 井戸端も秘密らしい声となり 水客
 秘密などなし大の字にねころんだ 古方
 それまでは秘密にしとくい話 一点子
 秘密みな喋らせる氣の注いで呉れ 賀峰
 魚心水心こつそりと袖の下 生々庵
 秘密会議ノツクつき〜待たせられ ひろし
 開店を明日に内輪のもめは秘密 一瓢
 卯きように割つて昔をかたならぬ 水客
 おぼろ夜の秘密へ池の鯉がはね 鮎美
 女性のヒミツを飽いた婦人科医 六童子
 善人の秘密は小さく胸に抱き 香林
 押ピンでひとの秘密をこめて置き 水客
 公然の秘密が大手振つて来る 一点子
 うちあける秘密それにもなる秘密 夢裡

兼題 「同 伴」 武部香林選

同伴が中へウツカリ割込まれ 狸仙
 同伴は娘と同じ年令であり 黒天子
 同伴の女同志の長びなし 三司
 同伴が変るとボーイ眼で笑ひ 淀月
 同伴の客へ仲居の無表情 玲人
 同伴へ女中足音たてまくる 塗杖
 橋筋で同伴の女がひつばられ ひろし
 社長又自慢の秘書を同伴し 省三
 同伴で社長四角い顔である 恒明

小兒科 内科 性病科
安岡醫院
 安岡三四郎
 道頓堀・日本橋南詰
 東へ半丁浜側
 電話南⑩三二四六

同伴の母が入学する如し 丁路
 二号今日同伴で出る柄を選び しげを
 同伴のアチラ帰ると言ふポーズ 抄兒
 恐妻でよし何処へでも御同伴 都詩子
 同伴の犬を連れてるように見え 賀峰
 髪白き妻と銀座のネオンの灯 六童子
 同伴で春を歩けば蝶が追ひ 帆加夫
 同伴の方がつかれた幼稚園 圭三
 同伴で来たデパートは氣がつかれ 水堂
 同伴へ寿司二人前走らせる 梅志
 同伴でおいでと社長のくだけ様 十四郎
 同伴は化粧売場もついてゆき 雄声
 アベックで故郷の墓へ膝まづき 丁路
 同伴の子にエチケット教へられ 勢波
 上京へ熱海で降すつれをつれ 修三
 御同伴歓迎をひがむ一人旅 生々庵
 次の日も言わず靴磨きで別れ 水客
 同伴の氣持ちもくんで酒を止め 生々庵
 榮転の同伴赴任へ日本晴 季贊
 同伴の見栄が呼ばれた高級車 天貧
 お二人さんと言ふ名でおこと呼はれり 水客
 同伴で春の埃を吸ひにいこ 正斗
 同伴の招きへ内助ふり返り 香林

席題 「開 店」 友淵貴山選

開店の板場へ刺身寄の色 水客
 開店の初から帳付の客が来る 天貧

開店を訪へば上まで昇らされ
 開店をしては挨拶状は出さず
 近日開店板塀のまゝ古びゆき
 本屋開店立説ばかりいる
 パチンコヤでない開店を見つかり
 手不足のピラ開店とかいてあり
 開店と聞いて十年振の友
 総選挙近し開店日の花輪
 開店へ風船はしの子とはいり
 開店へマダムはかゝるい唄も出る
 開店の時の愛想何処へやら
 開店の電話うれしく三通話
 開店の今朝神棚へ打つ燈
 開店の花輪一本つつ抜かれ
 開店へ倉庫の中はそのまんま
 半分はマツチの客の店開き
 始めから赤字で趣味の店開く
 開店へ一升瓶が部屋にこけ
 パチンコ屋花輪に今日もはたき懸け
 諸車控墨黒々と店開く
 開店は皿の不足を買いに出し
 開店へ犬も同じ様に食い
 机文置いてプロカー開店し
 開店のピラへ隣りは店じまい
 開店の日の牛肉を買ひそこね
 開店の苦勞が苦勞のまゝの日々
 開店の手の平の汗はるの汗
 開店へW・Cもよくはやり
 開店に想う亭主の指のふし
 開店へ義理のある名が一つかけ
 開店の一瞬売切致し候

淡舟 賀峰 生々庵 正斗 少将 賢二 摩太郎 胡蝶 しげを 潮花 啞醉 鮎美 番茶 都詩子 古方 抄児 葉光 夢裡 番茶 古方 牛歩 黒天子 省三 賢二 林 少将 水客 鮎美 正斗 三司 貴山

ネクタイを外して個性とり戻し
 ネクタイの山を夫婦でかき探し
 卒業のネクタイ嬉し朝を起き
 ネクタイ履結び方まで教へて
 誕生日子にネクタイを贈られる
 ネクタイが呑んだまゝの酔心地
 ネクタイは当世明治の服を着て
 ネクタイの好みも無智で儲け
 喧嘩にはネクタイ締め直し
 ネクタイを変えても気付かぬ妻であり
 しゆみよけて短かくネクタイ結ぶ父
 くたびれネクタイで来る安定所
 ネクタイがほつたらかしてあつた朝
 ネクタイの好みへ愛人口がすぎ
 ネクタイを編んで贈つて別れる気
 ネクタイをとつて大きく脊のぼする
 浮氣した首にネクタイある怒り
 あまへる手でネクタイを締めさせる

水堂 木声 摩太郎 省三 賀峰 水堂 天貧 淀月 丁路 水客 古方 淀月 古方 栗 古方 正斗 一斗 潮花

席題 「マダム」 正本水客選

マダムから意見を見られる借が出来
 常連と来れば素顔のマダムが出
 人情にもろいマダムを泣かせて来
 押売りへマダムあつさり一つ買ひ
 払へない涙をマダムに言伝ける
 二次会のプランへマダム顔を出し
 どなたにもマダム天涯孤独なり
 こみあげてくるれきにマダム酔ふ
 本心を語るマダムは水を注ぎ
 真実を語るマダムは水を注ぎ
 マダムまで出てバイ／＼／／ケレテツッ
 マダムまだ若し文学チト判り
 飲まざれば駄目マダムのゼツチエー
 信心でマダムと会つた福荷道
 しみる／＼とマダムに金を借る話
 レコードを止ませマダム眼ますわり
 電車の窓からマダムの家とマダムの子

喜久堂 しげを 恒明 梅志 潮花 省三 鮎美 盗杖 貴山 正則 香林 以兆 古方

お愛想のクラスに酔うて来たマダム
 四捨五入するにやましいマダムの眼
 大万 合同句会 (大阪市)
 阿倍野 三月二十六日 於 近映地下直營食堂
 須崎豆秋報

父ちゃんの番をしている花見酒 圭三
 着くまでに半分へつた花見酒 三司
 花見酒やつぱり課長うさぎ型 博也
 花見酒きつちり狐雨となり 鮎美
 花見酒下戸のカメラに写される 万葉
 下心なんべん来ててもよう言はず 文蝶
 下心落書をほめ猫をほめ ゆづる
 見え透いた贈物だが貰つてころ 貞女
 下心あつての負けと知つて呉れ 十四郎
 みわたせば皆下心もつた顔 凡九郎
 おとなしいので下心云うてやり しげお
 大いなる下心杉の苗を買う 正斗
 春先は紺のダブルがよく目だち ひろし
 春先の風に盲人侍ちどまり 葉光
 動かない金魚に春の水をくみ 貴山
 春先の出来事酒がはいつてた 日本村
 エムボタンはつて社長の廻り椅子 春柳
 旅行中だ言つとけと社長云ひ 豆秋
 ジャムパリの社長で好きが裏通り 勢三
 モテテ居る大阪弁の社長さん 晴峰
 好調な景氣へ社長椅子廻る 紫香
 二次会で荷になり出した記念品 春燈
 敗戦も知らず記念樹のび上り 梅里
 結婚の記念日忘れ外で飲み 賀峰
 酔うても記念写真にシヤンと撮り 摩太郎
 記念品恩師は涙もろくなり 青丹子
 記念写真真牧師夫妻の顔にまけ 梅志
 老夫婦芽出度がられて写される 路郎

川 梅田支部句会 (大阪市)
 三月九日 於 阪神ビル
 水谷鮎美報

川 淀川支部句会 (大阪市)
 三月二日 武部香林報

父の為泣いて夜中に酒を買い 敬二
 ワンタンも絶えて大阪寝しきり 水堂
 明け方になつて論客寝てしまひ 香林
 吾れも又大菊池ちんちん郷関を出る 六竜子
 女流作家と騒がれ何時か姥様 都詩子
 脱稿へ妻も来て飯む茶の香り 若菜
 稿料の入つた朝の響を刺り 凡太郎

川 弓削支部句会 (岡山県)
 三月十四日 於 金光教神殿
 福島鉄児報

長男に生れ精農家と言われ 不老
 上敷が出され炬燵がしまわれる 麗雨
 縁とりへ上敷だけは買うて敷き 白頭

品質優良
タチカワペン先
 TACHIKAWA PEN
 大阪市東区豊後町四八
 立川商事株式会社

タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画紙
 タチカワ

上敷の破れに止る豆電車 柳童
給料の取高オールドミスがしめ 鉄児
オールドミス男の口に負けてる 七面山

川 堺支部句会 (堺市)

二月二十六日 於 八木摩太郎居
八木摩太郎居

テレビまだ買へぬ身分で小市民 たかし
テレビジョンあんな顔から声を出し
テレビから笠置のプギを床で見ると
このこれでどうだ算盤玉を見せ
割算になると鉛筆貸せと云ひ
酒飲めど飲めど算盤忘れてず
咽喉仏見せるあくびも出る日向
日向水金魚疲れた泳ぎよう
日向から障子へ母の声を聞き
竹馬で土蔵の日向へ背をならべ
ソロバンが三つ答へが三つ出た
ほころびた梅を見つけた深呼吸
深呼吸して決心の手形書き
御時勢に勝てず旧家の壁も落ち
庭園の石も家宝に数へられ
電車道に近く旧家の尙栄え
荷厄介旧家の穀は身に耐へず
旧家にも共産党の次男坊
縁談へ父は旧族を忘れかね
菜の花が床に旧家は底冷えし
左前旧家の広さもてあまし
い鴨にされて近道教へられ
近道を教へて客を送り出し
貧乏くじあやまりにゆく役にされ
路 郎
貴 山
羅 生
豆 秋
梅 里
文 蝶
一 飄
潮 花
清 光
凡 九郎
左 久良
葉 朝
夢 遊
雄 声
摩 天郎
湧 泉
晴 峰
好 郎
梅 志
香 林
無 路
幽 王
郎 郎

川 雑部 圭支部 ウイロー社句会 (ハワイ)

古川魔花麗報

「ホロホロ」とは布哇土人語で散
歩外出遊行等の意味に使用される
NEW CAR 一家を乗せて島廻り 常
ホロホロも程におしよでハツさる 快夢起
今からは自由の体ホロホロへ 磯 朗
ホロホロのような視察も官費さか 揮 山
ホロホロの娘を母親は寝ずに待ち 魔花麗
ホロホロも仕事もみんなアロハシヤツ 旋 風

人生にホロホロがあり夢があり 笑
ホロホロへ犬のお供をする夫婦 泉 水
はしやいで明日のホロホロ子等は待ち 曉 舟
気まぐれのホロホロ友の家も訪ひ 峯 雪
ホロホロも知らずあの世の旅に立ち 沙 兆
愛犬のホロホロ女中共に連れ 晴 峰
ホロホロの帰りを草木などさけて 純 香
ホロホロへ草履の祖母も楽しそう 細 民
ホロホロの恋散歩より内を好き 柳 風
老らくの恋散歩より内を好き 自然生
アベックでないホロホロは極へ立ち 柳 葉
ホロホロも気随気儘の独りもの 同 舟
ホロホロも共にするまで漕ぎつづける 河 舟
ホロホロに気に入った家見つり出し 野 涉
絶景へホロホロインの灯が入り 迷 朝
ホロホロのプラン二人の胸で組み 亭 駒
連れのなほホロホロは草臥れる 木 公
ホロホロもいゝささまた飲みに行く 草 一
打ち明けるチャンス来ぬ間に散歩する 草 一
ホロホロを感じた妻財布しめ 萬 彌
川 雑部 圭支部 三報
三月十八日 贈所新三報
廣告へ詐欺とせしらずに金送り 那 利
求縁の広告大学卒と書き 漫 多朗
募集には社交嬢にとあつたのに 眞 磨居
ライバルへ流行るスタイル競い合い 勢 園
流感がはやつて王子酒にする 新 三
流行を着る娘に一家さゝえられ 風 鈴
青春を思ひ浮べて流行歌 貞 春
こんなの流行つてあるよと妻若し 小 雀
流行り風邪急にマスクの数が増え 南 石
身を売つてまで流行に遅れぬ気 浜 小
ハンドバックだけは流行の型を持ち 丸 喜
サルベージ軍艦マーチで船出して 九 益
夜遊びを叱らざず連の兄にふれ 橋 村
金貯めぬうちにテレビが来てしま 閑 古鳥

退け者になり安静をよく守り 溪 泉
働けど／＼妻肥えた丈け 愛 郷
荷の嵩む退院の療友に手を貸して 文 糖
手土産が倍にも戻る得意先 蕉 青
年賀状丈はかゝさぬ筆不精 青 嵐
厄払ひ今年限りの検温器 眞 砂
川 貴生川支部句会 (滋賀県)
一月十四日 於 三本柳公民館
黄瀬美秋報

一泊に惜しいお部屋をあてがわれ 文 子
朝寝坊ねまきのままの電話口 てる子
朝寝坊一仕事した人と逢ひ 俊 一
多数決クイズにダイヤル廻される 俊 子
御祝儀へ下手な語が恐れ入り 紅 月
御祝儀はもう居酒屋で酒になり 柳 月
素面では行けぬ話にコップ酒 湖 人
今度こそ言ふことがありコップ酒 観 月
復縁を迫る積りのコップ酒 春 菓
方言をむき出す母に気をつかい 輝 子
方言で訊くと答は標準語 春 菓
三味線がうろたえてある旦那芸 美 秋
三味線をとりたて仲居酒のみ 大 三
珍客がもみくちやになる子沢山 木 八
別室へ来て坊さんと胡床かく 斗 志
別室がうれい悲鳴上げてある 夢 生
川 託問支部句会 (香川県)
一月 大西迷窓報
人生の夢は次第に小さくなり 土半太郎
発明の夢変人にされて生き 水 青
婚約の二人の夢は錯綜す 家 里
美しい夢をこわさぬように騒ぎ 寛 子
母さんも居るのに口笛聞えて来 迷 窓
父ちゃんの口笛久し振りで聞き 信 星子
水道栓締めて口笛確かめる 迷 窓

阪田膽写版
二五村田芝区北市阪大
株式 会 商 田 阪 社 株
番一九九五 島 福 話 電
番 四 ~ 一 三 六 五

質草を脳裡に置いて飲み直し 烈 女
座ぶとんを進められて帰られず 美代子
先輩が来て座布団を滑り降り 国定子
座ぶとんを出されて女衾下がり 喜代子
買物に行つてパチンコ屋で粘り 中納言
買物の仕様家計を見破られ 魚 善
川 みをつくし川柳会 (大阪市)
三月十日 於 天王寺中学校
戸田古方報
国鉄の駅三分咲き七分咲き 古 方
花ひらの舞いこむお重はげし 同
お茶漬の味かみしめる朝帰り ひろむ
洋服の不行儀な娘が茶を習ひ 光 二
金持つて来いと彼岸の鐘が鳴る 豆 秋
花の下ごもくのように人も散り 義 広
花見からよつてかえつてしからる せつ子
ほんとうに花を見たならすれをう 正 人
茶柱がどうのこうのと朝の膳 のぼる
青いものみんな茶にして宇治下る 貴 山
よかんが欲しいとひるのお茶を入れ 豆 秋
せつかな客が帰つてお茶が沸き 花 香
清貧の中へ枯淡な茶をたてる 凡 九郎
眼頭がうるむ喜劇を見て居たり 貴 山

雑川 岡山支部句会 (岡山市)

三月十五日 於 山陽旅館 大森風来子報

女秘書採用されて恐くなり 古心
採用といわず二三日来てごらん ただみ
白酒の客を酔わして叱られる 大甲帽
貨ポトあつらえ向きの春霞 八ッ茶
雪のある山も一緒に春霞 花峰
ソロバンがちつとも合わぬ春霞 方大
愛して証視線線をそらし合い 美能留
勞務課が働蜂を例に説き 十九平
刑務所で食う働きの手を習い 佳目夫
横綱のストラップを野次が飛び 忠美
ストラップが家計へよくベレー帽 笑気坊
卒業が待てない程に慕われる 風来子
通学のベタル今日から通勤へ 恵二朗

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

三月十二日 於 桑山と上居 野村味平報

兄さんのリックサツアでハイキング 志づ
入学の晴着のまま砂遊び 貞人
おしつこもしつこも出る入学日 卓風
橋のない川へ道草してしま 智吉
道草が寝ころんでる陽のぬくみ 菊郎
姉さんと呼びたい様な継母あり 桃園
継母と言はれたくない子に育て 光郎
継母が居て長女は早く嫁きたがり 魯木

雑川 日立櫻島支部句会 (大坂市)

三月四日 於 日立造船所 真鍋一瓢報

節分の醬でホールの灯に踊り 小波
節分へ入園のかけた愚痴を開き 定美
節分の豆かぞへかぞへ食べ 椿
パチンコの煙草も入れて市場籠 淡山
パチンコの音が都会の音になり 花代子
パチンコの魅力へ今日も家をもり 巨船
衣替へパチンコの玉ころがり出 京花
ダンサーの靴は稼いだ艶であり 一球
靴音を父と知つてる子が走り 花蝶
客待ちの夜は淋しいハイヒール 秋花
晩酌へラヂオのジャズが気に入ら 正照
スキ焼をすれば晩酌はしくなり 柳魚
なごやかにやる晩酌へ子があま 有泉
晩酌へ丁度間にあふ雲丹が着き 清潮
晩酌に無理がきくのも給料日 天風
婦權獲得まだ晩酌とまでゆかず 一瓢
柳だけ書いてツバメの書りぬ 千代美
約束のポト柳の下で待ち 花美
餅花をつけて柳に新春が来る 幸子
気に入らぬ風になびいてゐる柳 花奈女
雨蛙柳見あげただけのこと ひさみ
柳々銀座を唄の街にする 潮花
雨靴を借りるに足らぬ春の雨 一鈴

南区 杏林川柳会 (大坂市)

二月十七日 於 捨舟居 南捨舟報

夫婦きり犬も家族の一員か 一哲
丸籠の追うてる犬に縫い目あり 捨舟
夜警さん犬の襟には動まらず 迷路
卒業が苦になりそうな世相なり 鳥耕
パチンコとスケートは卒業し 瑞川
卒業さえすればええがな若旦那 羽枝郎
停電をラヂオの前で口惜しがり 太希志
父さんの留守は切られる浪花節 生々庵

短冊展入選句

於近鉄百貨店七階ギャラリー

屋上・新調

打ちました走ったとて親節切り 比呂志
臨時ニュース大臣一人 瑞川
屋上へ泳ぎに行くと云ふ都会 蜂路
屋上の汽車へ子守も乗せられる 行俊
屋上に淡路辺りの雲が見え 晴芽
屋上へ出て怒鳴りたい昨日今日 きさ子
屋上に珈琲のむ間を待たさるゝ 留吉
屋上で一ぶくすうて子を探し 稔
屋上へ逃げて万引捕へられ フジ子
新聞の記事は屋上からの繰 勝己
屋上の風もうれしい新入社 きさ子
屋上をカタコト鳴るハイヒール 梅志
屋上へ春の陽さしに誘われて 都詩子
屋上でつら／＼思ふ事多し 貴山
屋上で大阪の雲見つけたら 晴峯
屋上まで来たに云へない弱さ きさ子
屋上で写真撮つてる恢復期 方正
屋上の神社アプレにピンとこず へとち
屋上へきて半皮がとれている 水客
屋上から見た人の世の色と音 鯛人
屋上へ逃れて二人息を入れ 操子
屋上のあの辺僕のおわび住居 晴芽
屋上であざける人間苦の世界 摩太郎
屋上の稲荷へ拜むきまぐれさ 直郎
屋上の恋へお日様近すぎる 幽王
屋上から見れば女と判るだけ 坦水
屋上に子を遊ばせて特価棚 晴峰
屋上で屋飯にする子と上がり 琳子
屋上から我家の位置を探つて見 喜久堂
築港が見え屋上嬉しがり 文蝶
屋上へ来れば大阪山も見え 翻骨
屋上にはや春風がそつとふき 柳生
屋上の係り日焼を心配し 行俊

★大万川柳(第廿七回)を募る
兼題「週末」路郎先生選
締切・五月十五日(句数五句以内)
発表・五月廿一日(内報に指示)
御投句は大万宛・どなたでも
梅里の店 大萬
東京をばと 灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街

上で見れば大阪城真近 淡舟
人に酔ひ屋上ほつとする所 方正
見下せば蟻の如くに入稼ぐ 喜久堂
屋上の狂人描く菊地寛 扇子仙
屋上で見た大阪の街の貌 つぐを
新調が天気予報を見て出掛け 幽王
無理したと知らず新調美まれ 柳亭
新調するどころかい納税期 純也
新調の服あらむけこちらむけ 白酔
新調の帽子へいつか手が行つて くにを
ポトナスのたび新調のよい身分 勢波
新調の畳は子等を正坐させ 佐和子
晴姿父も来て取るしつけ糸 翠光
新調で二人はうれしい花の下 没食子
新調を着てますと云ふ女の子 光二
新調の服で故郷のバスにゆれ 風路
新調を月賦ですかは失礼ぞ 友三郎
新調で相合傘としやれてゐる さと子
新調を見せたい人にまだ逢へず 文蝶
新調は深呼吸する気にもなり 竹声
新調が胸はつて行く戎ばし 幽王
新調をあら／＼汚して児が達者 同
合格祝に父と見てゐる既成服 万的
新調の靴が目立つてクラス会 同
ぬかるみへ新調の靴慌てたり 浴水
新調の背広寝母に見送られ 浴水
新調の背広の友にチトひがみ 佐太郎
(入選三才は前号五頁へ発表)



編輯局にて

★：前号から増ページをしたので一段と読みごたえがすると、スエブル好評だ。それでソロバンが持てるのかいと心配してくれる人さもある。持てるか持てぬか、そんな心配はオレにさせて、大いに読んで呉れ大いに作つて呉れと云つている。★：堀口塊人氏が「いとへん」、東野大八氏が「人間横丁」何れも人間味があふれていて柳誌

不朽洞 会から

▼築山快夢起氏（ホノル、市）から三月廿五日のエアメールで桜

川不水氏が南米からの帰途ホノルルへ寄港されるらしいので船名を知らして欲しいとのことに返信はしたが間に合わなかつた。快夢起氏からの重ねての通信によると、その日の午前十一時には早くも、

らしい好説物である愛読された。★：座談会は交通関係の不朽洞会員を頼られた。★：前号で欄原飯山へ行くようなことを書いたが、選挙関係の人達が多いので、もう少し落ちついた時の方がよろうと云うので、延期されることになった。私の方でも、赤坂町行きの前夜祭としては少しきびしすぎる労働なので、むしろ其の方がありがたかつた。★：前号で三月二十九日の朝、私の川柳生活五十年の記念放送をした様に書いたが、録音直前に延期されたので、印刷の方はもう刷上つていたのである。誤報を伝えてまことに相済みぬと思つている。延期の理由は皇太子殿下がいよ／＼お出かけになるため、いろんな催しの放送で、どうしても時間がないからあなたの時間を譲つて呉れぬかと云う交渉があつたので延期を快諾した訳である。（略）

入港古川麗花麗氏に電話で連絡がありその時、不水氏の話では油を積み込んで四時半に出港、若し一泊する様だつたら電話で連絡する由であつたのでハワイ在住の不朽洞会員だけでも召集してと歓迎の準備をして待ちうけ麗花麗氏が連絡奔走も遂に空しく会えなかつたとのこと▲昨年春渡欧された田村孝之介画伯夫妻が三月二十日に羽田に到着無事帰神されたお欣び

申上げる▲松江梅里氏（大阪市）は「大万川柳」第二輯（非売品）を発行され、三月廿六日夜の大万川柳二周年記念句会の出席者に頒布された▲福島鉄児氏（岡山県）の通信によると、弓削駅前路郎師の句碑が夜でもハッキリ見えるよう照明設備に力を尽された弓削駅長の本田喜多八氏川維弓削支部同人が今回福塩線の上下駅へ栄転された由▲布施筑川医博（大阪市）は学会のため三月三十一日東上、四月五日帰阪された▲中村祐吉氏（大阪市）は今回「イギリスの図書館」を刊行された。本書は大阪府立図書館長である氏が廿五年秋、渡英された時の図書館見学日記であるが、イギリスの図書館事情を知るには好適の書である。（非売品）▲福田丁路氏（高槻市）は三月廿九日に伊賀上野に芭蕉翁の遺跡を訪ねられた▲市場没食子氏（大阪市）は学会に出席のため四月四日東京着、五日朝、山雨楼氏を見舞はれ午後藤本満年氏を訪問九日に帰阪された▲北川春葉医博（大阪市）学会のため三月廿一日東上、四月五日に帰阪された▲本田恵二郎氏は岡山県英田、勝田両郡、齒科医師会々長を六ヶ年間（三期）勤められた今回会長を退かれたので川柳一辺倒の日が送れるとのこと▲小田

沙兆氏（ホノル、市）はホロホロイン（HOROHOLOIN）と云うレストランを開業された由御発展を祈る▲足立春雄医博（大阪市）は学会のため四月二日東上、七日に帰阪された▲大倉四峯氏は岡山県邑久郡牛窓町協和町警察官舎へ移られた▲若林草石医博（兵庫県）は四月七日に退院され目下自宅で静養されている▲水谷竹荘氏（大阪市）は四月四日東上市場没食子氏と共に富士野鞍馬氏を訪問、氏は栃木市大太平山の視察の温泉に遊ばれ八日に帰阪された▲大森風来氏（岡山市）は三月卅一日から一日へかけて第二回目の養生園を慰問され、五風忠美両氏の協力で句会を開催された▲丸尾潮花氏（大阪市）は四月十六日附で、日立造船の陸機部陸仕課に転動された。▲阪田良坊医博（下関）は昨年病魔に襲われたが最近ではすっかりよくなりましたとのこと▲好きな酒は殆んど飲まず、煙草は一日三本（朝日）で医者の不養

大阪名菓

もなか民かまご

源氏の最中

百貨店著名菓子店にあります

大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

民かまご本舗

電話 三三〇九

生と云う諺をア然たらしめていられる。昨年の病氣は大家診定によると非常な過労に起因する一過性の脳血管異常だとのこと。そこで「高血圧症の予防及び治療とそしでの自家血液筋肉注射療法についての実験的研究」と云う長い題目の研究発表を広島鉄道管理局へ提出されたそうである。病氣をして、ただはおかないところ、川柳博士のうれしいところ。▲山野星登氏を会員名簿から除く。

新会員紹介

四月

小池しげお（大阪府）正
竹内圭三（兵庫県）正

以上 紫香氏推薦

山崎帆加夫（大阪市）正

鮎美氏推薦

川柳不朽洞會

指 導 麻 生 路 郎
 贊 助 池 沢 樂 居
 長 谷 川 一 徹
 長 野 晴 浜
 藤 村 守 作
 中 川 明 雄
 白 村 祐 吉
 高 村 六 郎
 藤 村 雅 光
 田 中 長 二
 岩 崎 愛 二
 洞 友
 鳥 山 一 步
 沖 野 岩 三 郎
 龜 井 晨 修
 田 村 孝 之 介
 山 本 雨 美
 安 川 久 留 美
 山 路 閑 古
 前 田 伍 健
 柴 谷 幸 二 郎
 蛭 子 省 二 郎
 麻 生 葎 乃 二
 橋 本 紫 雨 乃
 高 本 紫 雨 乃
 沢 田 四 郎 作
 東 野 大 八
 不 朽 洞 會 員
 一 特別 會 員
 中 高 生 々 庵
 奧 村 丹 路
 戸 倉 普 天
 上 田 翠 光
 木 村 孤 浪
 戸 田 古 方
 水 谷 鮎 美
 市 場 没 食 子
 一 維持 會 員
 福 田 山 雨 樓
 寺 井 銳 々
 前 山 北 海
 古 川 麗 麗
 内 藤 草 一 郎
 三 輪 晚 翠
 村 松 夢 裡
 大 坂 形 水
 藤 岡 至 雲 瑠
 井 上 湧 三
 北 林 松 二 代
 宮 田 不 二
 西 垣 錦 風
 川 村 好 郎
 築 山 快 夢 起
 永 田 里 九
 高 田 沙 逸
 小 田 兆 漁
 市 岡 曉 舟
 三 鴨 美 笑
 林 盆 施 風
 白 砂 施 風
 一 止 會 員
 吉 田 水 車
 大 崎 豆 秋
 須 崎 八 秋
 石 曾 根 民 郎
 正 本 水 客
 黑 川 紫 香
 丸 尾 潮 花
 北 川 春 巢
 石 井 白 面 人
 布 崎 方 正 川
 尾 崎 不 水
 櫻 舟 久 米 雄
 浜 田 久 米 雄
 好 崎 申 仙
 菊 沢 小 松 園
 逸 見 灯 竿
 清 水 白 柳 子
 鈴 木 九 坂
 夷 川 一 笑
 小 川 恒 明
 浪 永 玲 之 介
 德 部 香 林
 武 部 香 林
 大 森 風 來 子
 木 島 嶺 泉
 福 田 幽 王
 中 島 鐵 夢
 新 川 博 也
 新 川 博 也
 丸 山 弓 削 平
 直 原 七 面 山
 黒 田 笑 泉
 上 野 粗 影
 狩 野 正 司
 西 森 花 村
 河 村 日 満
 代 尋 四
 家 沢 芳 花
 黄 瀬 美 秋
 藤 本 満 秋
 西 口 如 川
 姫 田 夕 鐘
 福 島 欽 兒
 黒 田 久 米 女
 藤 本 茶 々 路
 塩 浜 一 路
 谷 内 一 草
 福 本 翻 骨
 布 村 南 子
 中 南 夏 六
 西 遊 星
 い わ せ
 杉 山 一 貫
 家 本 富 至
 横 部 牛 歩
 服 部 十 九 平
 大 森 蟬 句 渠
 長 谷 川 三 司
 荒 木 哲 水
 山 中 志 乃 布
 桑 原 養 痴 園
 成 瀬 月 仙
 若 林 草 右 雄
 足 立 芳 雄
 大 西 迷 窓
 延 永 忠 美
 地 俱 山 風 樓
 浜 畑 胡 蝶
 阿 形 一 杉
 坂 田 良 坊
 大 石 川 宛 流
 安 岡 珉 苑 郎
 長 谷 川 迷 路
 南 木 弾 舟
 黒 木 一 正
 半 田 瑞 哲
 河 村 無 名 林
 木 村 無 名 林
 田 村 瑞 哲
 藤 原 中 二
 益 倉 貞 女 案
 大 倉 四 案
 山 田 季 贊
 山 田 鳥 莊
 水 本 無 尽
 水 田 千 石
 中 村 た だ み
 山 本 葉 光
 東 喜 久 堂
 鈴 木 天 貧
 木 村 千 谷
 田 垣 方 大
 那 谷 光 郎
 野 村 味 平
 木 村 水 堂
 贈 所 新 三
 花 岡 英 子
 八 木 摩 天 郎
 福 田 谷 水
 佐 木 告 天 子
 佐 々 木 告 天 子
 稻 原 一 善
 田 村 藤 波
 峯 尾 魚 々
 岡 田 夜 潮
 中 井 三 介
 政 山 中 納 言
 中 山 三 林 坊
 白 井 三 林 坊
 安 倍 寛 子
 青 柳 扇 子
 岡 村 牛 耕
 縮 葉 鳩 花
 下 山 清 潮
 本 田 恵 二 朗
 真 鍋 一 朗
 飛 雲 春 風
 松 川 杜 風
 馬 場 夢 生
 永 田 六 竜 子
 村 上 ゆ づ る
 森 本 法 泉 子
 井 野 格 一
 日 置 文 笑
 中 島 兎 庵
 佐 野 牛 歩
 丸 山 三 平
 尾 野 お さ む
 白 山 紫 郎
 飯 島 二 桂
 岩 島 雄 歩
 後 藤 梅 志
 小 池 し げ お
 竹 内 圭 三
 山 崎 帆 加 夫

募 集

課題吟募集

級 友 (十句) 西尾 葉選
 社 長 (十句) 川村好郎選
(五月二十日締切)

注 文 (十句) 清水白柳子選
 クイズ (十句) 弘津 柳慶選
(六月廿日締切)

毎號募集

近作柳樽雜詠廿句) 麻生路郎選
 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
 文章(評論・研究・感想其他)
(毎月廿日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
 ▼ 『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
 ▼ 『課題吟』は何人でも投句が出来る。
 ▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

川柳雜誌

第八卷 第五号

定価 四〇円
 送料 (四円)

(載轉禁)
 半ヶ年 二六四円
 一ヶ年 五二八円
 昭和廿八年 四月廿五日印刷
 昭和廿八年 五月一日発行

大坂市住吉島四丁西五丁目二五番地
 編輯 麻生 幸 二 郎
 行印 廣 人
 大坂市住吉島四丁西五丁目二五番地

發行所 川柳雜誌社
 大坂市住吉島四丁西五丁目二五番地
 電話 日 座 六 四 七 五 〇 五 〇

Printed in Japan

THE SENRYU ZASSHI

NO. 312

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

酒販用紙コップ
 食堂用紙製品一切



アイスクリームは
 堅牢で衛生的なこの容器で

特殊紙器工業株式会社
 フタバカツブ株式会社
 大阪市阿倍野区晴明通一丁目
 電話 天下茶屋 ② 2812・2813

避妊には..
 ゼリー剤を!



★溶ける時間がい
 らず速効且つ確実
 で連用しても無害
 ★注入器で深部へ
 送るか、タンポン
 に塗り御使用をノ

サンシーゼリー

山之内 1姫 2太郎 3サンシー

遠くに春がすみ……振りかえる花の白さ



5月31日まで

汐干狩クーポン券
 (なんば各往復運賃 汐干狩券 員500宛)
 大人 350円 小人 220円

汐干狩券も発売
 大人・小人とも 100円
 (員500宛付 現地では120円)

- ・団体観司の便があります
- ・無料休憩所 湯茶接待所あり

南海電車

お問合せとお申込は 南海交通社
 なんば TEL ② 2931
 梅田新道 " ② 5019